



出雲文化活用プロジェクト

手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業
—平成31年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書—

手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業

平成三十一年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書

目次

| | |
|----------------------|----|
| まえがき | 1 |
| 平成三十一年度 チラシ | 2 |
| 手銭記念館所蔵資料を活用したアウトリーチ | |
| 連続講座「古典への招待」 | 4 |
| 大社能を知る集い | 6 |
| 料理ワークショップ | 8 |
| 古文書解読講座 | 10 |
| 館外展示 | 12 |
| シンポジウム | |
| 論考 | 14 |
| 久保田 啓一 | |
| 伊藤 善隆 | 22 |
| 小林 准士 | 34 |
| 発表要旨 | 36 |
| シンポジウム概要及びディスカッション | 42 |
| チラシ | 43 |
| 観光分野と連携した環境整備・情報発信 | |
| 和食プログラム | 44 |
| ツアー | 45 |
| 情報発信 | |
| 他機関との連携 | |
| 大学連携 | 46 |
| プロジェクト事業履歴 | 47 |
| 文芸資料調査及び成果 | 50 |
| 手銭記念館企画展 | 56 |
| 総括 | 61 |

出雲文化活用プロジェクトについて

出雲大社のほど近く、神迎の道に面して居を構える手銭家は、江戸時代前期に杵築(現代の出雲市大社町)へ移り住み、酒造業の傍ら御用商などさまざまな商売を営むとともに、江戸時代中期から明治維新までの間、長く大年寄、御用宿などを仰せ付かってきた。このような事情もあり手銭家には、絵画、工芸、刀剣刀装具等の美術資料と生活用具等の民俗資料、未整理の資料も含めて膨大な古典籍と文書類が残されている。

手銭記念館は、手銭家から寄贈された約五百点の美術資料の保存・展示を目的として平成五年に開館した私立美術館で、館蔵資料および手銭家所蔵資料を利用した企画展を、これまで継続しておこなってきた。

また、島根大学文学部山陰研究センター(以下「山陰研究センター」と手銭記念館は、平成十七年から手銭家の蔵書に関する調査を継続しておこなっており、公開可能な資料から順次、島根大学附属図書館のデジタルアーカイブ上で公開している。

このような展示と調査の過程で、記念館館蔵資料と手銭家に残されている大量の資料のいずれも、江戸中期から後期にかけての杵築と出雲地方に関する様々な側面を詳しく記録し伝える貴重な資料群であることが改めて分かってきた。

そこで平成二十六年、調査研究と資料の活用をより一層進めるために、「山陰研究センター、島根大学附属図書館、手銭記念館が連携して『出雲文化活用プロジェクト』を発足させた。このプロジェクトは、江戸時代の歴史、社会、文化を研究する上で大きな意味を持つと考えられる様々な伝来資料を整理・研究・解説・公開することによって、江戸時代の杵築における生活文化や文芸活動などの様相を広く地域市民と共有し、また、大社町の町おこしや振興への新たな材料や付加価値を提供することを目的としている。

初年度の平成二十六年度は「文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の助成を、平成二十七年年度から二十九年年度までは「文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の助成を、平成三十年年度は「文化庁地域と協働

した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の助成を受け、江戸期の出雲地方においてどのような生活文化が育まれ享受されていたかを、ワークショップ、連続講座、講演会、企画展示、他機関との連携事業などをおして、より多角的な視点で公開し、体験してもらおう試みに取り組んできた。

今年度(平成三十一年度)は、「文化庁地域と協働した博物館創造活動支援事業」の助成を受け、これまで継続してきた、所蔵資料を活用したワークショップと連続講座、島根大学附属図書館と島根県立古代出雲歴史博物館での館外展示を引き続きおこない、所蔵資料から見えてくる出雲の文化について、より深く、より広く知っていただくよう努めた。

継続しておこなっている所蔵資料調査や、プロジェクト事業としておこなってきた共同事業の実績を基に、今年度、島根大学と手銭記念館は包括的連携に関する協定を締結した。そこで、協定締結記念と、プロジェクト初年度以降の成果を広く知っていただくことを目的に、手銭家所蔵資料に関するシンポジウムを開催した。

また、(公財)図書館振興財団の助成を受けて、手銭家の所蔵資料及び本プロジェクト報告書を、クラウド型デジタルアーカイブシステムであるA D E A C から公開するとともに、手銭家所蔵資料をテキストに用いた月一回の古文書解説講座をおこない、その成果もA D E A C から公開した。

昨年構築した英語版ウェブサイト「Izumo Heritage Museums」については、今年度は多言語化(日本語、韓国語、中国語、繁体・簡体)、フランス語をおこなった。そして観光事業とリンクさせる試みとして、和食プログラムならびに、モニターツアーを実施した。

これまで山陰研究センターと共におこなってきた資料調査や資料解説は、継続しておこなった。

出雲文化活用プロジェクト実行委員会

公益財団法人手銭記念館

島根大学文学部山陰研究センター

島根大学附属図書館

出雲文化活用プロジェクト



出雲市大社町の手銭家には江戸時代の出雲文化を知る手がかりとなる資料が多く残っています。これらの資料を読み解き、活用・発信することを目的として、出雲文化活用プロジェクトが2014年に始まりました。本年も、様々なイベントを通してその魅力をお伝えしていきたいと思っております。

主催：出雲文化活用プロジェクト
【公益財団法人手銭記念館／島根大学法文学部山陰研究センター／島根大学附属図書館】
助成：平成31年度 文化庁 地域の博物館を中核としたクラスター形成事業



大社能を知る集い

能と狂言の世界 ～事始めから未来までⅡ～ 10月31日(木)17:45 - 20:00

「日本」を少し違った視点から見てみるきっかけにもなる、不思議な時間。能や狂言が大好きな方、初めて接する方、どちらにも面白く楽しんでいただけることをめざす、ちょっと欲張りなワークショップです。

- 開催場所：手銭記念館
- 定員：30名 ※事前の申し込みが必要です
- 参加費：1,000円(入館料含む)
- 講師：安田 登(能楽師 下掛宝生流ワキ方)
槻宅 聡(能楽師・森田流笛方)
奥津 健太郎(能楽師・和泉流狂言方)

【講師プロフィール】

安田 登(やすだのぼる) / 1956年生まれ。公益社団法人能楽協会会員。米国 Prof Institute 公認オルファ。大学時代に中国古代哲学を学び、漢和辞典の執筆に携わる。国内外で舞台を動めるほか、能および能の身体技法をテーマとしたワークショップ、能のメソッドを使った朗読・群読の公演や指導も行う。著書多数。

槻宅 聡(つきたくさとし) / 能楽森田流笛方。1961年島根県生まれ。島根県立松江南高等学校卒業。国立能楽堂研修第二期修了。故・寺井啓之、中谷明に師事。公益社団法人能楽協会会員。一般社団法人東京能楽囃子科協議会理事。重要無形文化財総合指定。島根乱声会主宰。

奥津 健太郎(おくつけんたろう) / 1972年生まれ。故13世野村又三郎信廣(重要無形文化財総合指定)に師事。東京藝術大学(狂言専攻)卒業。狂言のワークショップや講座、語りなど幅広く活動。安田、槻宅とともに「天籟能の会」を開催。「親子でたのしむ狂言の会」を毎年主催。公益社団法人能楽協会正会員。



料理再現ワークショップ

江戸時代のおもてなし料理 ～萬日記より～ 12月6日(金)

江戸時代、手銭家は大社を訪れる藩の関係者の宿(御用宿)の一軒を命じられていました。今回は、手銭家当主が残した「萬日記」から、寛政元年(1789)11月、松平行親(不昧公の弟)が宿泊した記述を選び、そこに書かれた献立の一部を再現・試食します。



- 集合時間：【調理からの参加】10:00
【試食のみ】12:30(14:00終了予定)
- 開催場所：大社コミュニティセンター
- 参加費：2,500円(材料費)
- 定員：調理 10名 試食 20名
- 料理指導：安藤 登(日本料理 登わ)
- ※事前の申し込みが必要です
- ※調理に参加される方は、エプロン、三角巾をご持参下さい。
- また、ご自分の包丁をお持ちいただいても構いません。

www.tezenmuseum.com

IZUMO CULTURE PROJECT 2019

平成三十一年度 チラシ

連続講座 「山陰地域をつなぐ史資料のデジタル化と活用事業」
(図書館振興財団助成事業)

古文書解読講座(全12回)

2019年4月～2020年3月まで
毎月第2木曜日 10:00-12:00

文化3年(1806)、文化10年(1813)、全国を測量した伊能忠敬が手銭家に宿泊した時の様々な記録をテキストに取り上げ、古文書解読のいろはから学んでいただく講座です。

- 場所：大社文化プレイスうらら館 第1会議室
- 講師：松本 美和子
- 定員：約20名
- 参加費：無料

※現在満員となっております、ご興味のある方は手銭記念館までお問い合わせ下さい。

連続講座

古典への招待(全4回)

『歌仙を学ぶ』

和歌研究が専門の野本瑠美先生を講師にお迎えし、かなの読み方、古典文学の歴史や鑑賞のこつなどを楽しく学ぶことのできる古典講座です。4回目となる今年のテーマは「歌仙」。六歌仙、三十六歌仙、百人一首などの歌人と和歌、散らし書きを取り上げます。

- 第1回 8月23日(金) 「歌仙」の始まり
 - 第2回 9月27日(金) 「歌仙」の展開
 - 第3回 10月18日(金) 「歌仙」に入れなかった人たち
 - 第4回 11月1日(金) 「歌仙」の影響
- 各回 13:30-15:30

- 場所：手銭家個室
- 定員：各30名 ※事前の申し込みが必要です
- 参加費：1回800円(入館料、資料代)
- 講師：野本 瑠美(島根大学法文学部准教授)

1981年生まれ。埼玉県出身。専門は平安後期～鎌倉初期の和歌文学。東京大学大学院人文社会系研究科日本語日本文学専門分野博士課程修了。博士(文学)。2011年島根大学に着任。



料理再現

手銭家に伝わる江戸時代の献立

2020年3月20日(金・祝)
昼の部:11:00-14:00/夜の部17:00-20:00

不昧公の弟である松平衍親(雪川)が来駕の折の献立を再現してご提供致します。

- 開催場所：手銭記念館
- 参加費：20,000円
- 定員：各回10名
- 料理：安藤 登(日本料理 登わ)



館外展示

手銭家資料で見る大社の文芸活動

- 島根県立古代出雲歴史博物館 常設展示室
6月12日(水)-8月5日(月)
- 島根大学附属図書館
2020年1月22日(水)-2月14日(金)

シンポジウム

国立大学法人島根大学開学70周年記念事業
島根大学・手銭記念館包括連携協定記念

資料から再発見する江戸の底力

一手銭家所蔵資料(文書・古典籍・美術)を繋ぎ活かす取り組み

9月14日(土)13:15-17:00(開場12:45)

- 会場：島根大学 法文学部棟2階 207(多目的1)室
- 定員：100名
- 参加費：無料(申し込みは必要ありません)
- 概要

趣旨説明：野本 瑠美 佐々木 杏里
基調講演：田中 則雄 島根大学法文学部長
報告：①久保田 啓一 広島大学大学院文学研究科教授
②伊藤 善隆 立正大学文学部准教授
③小林 准士 島根大学法文学部教授
パネルディスカッション/質疑応答

出雲文化活用
プロジェクト
2019

惜秋の茶会

記念館所蔵の茶器も取り混ぜ、点心、濃茶、薄茶をお楽しみいただく茶会です。

11月8日(金)、9日(土)11:00- と 13:00- の二回

参加費：10,000円

主催：公益財団法人手銭記念館

手銭記念館企画展

魅惑の漆器 6月5日(水)―9月2日(月)

文字とともに 9月8日(日)―10月21日(月)

出雲焼の試み 10月30日(水)―12月23日(月・祝)

出雲今昔Ⅲ ~学ぶ、遊ぶ~ 2020年1月8日(水)―3月8日(日)



参加申込み・問い合わせ

TEL/FAX: 0853-53-2000 E-mail: info@tezenmuseum.com
お名前とお電話番号、参加ご希望のイベントをお知らせください。



手銭記念館
TEZEN MUSEUM

開館時間：9:00-16:30

休館日：火曜日(火曜日が祝日の場合は翌日)、展示替期間中

入館料：大人600円(500円)、高校生以下400円(300円) ※()内は20名以上の団体料金

〒699-0751 島根県出雲市大社町杵築西2450-1 電話/FAX: 0853-53-2000 E-mail: info@tezenmuseum.com



【連続講座 古典への招待】

「歌仙」を学ぶ

手銭記念館と手銭家が所蔵する古典籍、古筆切、美術資料などを、テキストとして活用し、和歌を中心とした文学について学んでいただきながら、館蔵資料の内容や、江戸時代の大社における文芸活動について発信することも目的とした連続講座。今回で四年目となる。

開催日 八月二十三日～十一月一日

十三時半～十五時半

講師 野本 瑠美（島根大学法文学部准教授）
会場 手銭家和室

■第一回 「歌仙」の始まり

開催日 八月二十三日

参加者 二十四名

■第二回 「歌仙」の展開

開催日 九月二十七日

参加者 二十一名

■第三回 「歌仙」に入れなかった人たち

開催日 十月十八日

参加者 十七名

■第四回 「歌仙」の影響

開催日 十一月一日

参加者 二十二名

今回は、「歌仙」をテーマとして選んだ。

江戸時代後期になると、全国的にローカルな歌集を編むことが流行し、杵築文学でも『杵築三十六歌仙』、『杵築現存五十歌仙』などの歌集が、数

年に亘り編まれている。また、二〇一九年秋には、京都国立博物館において「佐竹本三十六歌仙」を集めた大規模な展覧会が開催され、「歌仙」という言葉を頻繁に耳にするようになった。

そこで、和歌の世界に親しんでいただくきっかけのひとつとして、「歌仙」という言葉と概念が生まれたいきさつから、後世への影響までご紹介するという講座が良いのではないかと考えた。

第一回は『古今集』真名序に出てくる「和歌の仙」という言葉が、「歌仙」のきつかけと考えられ、その後、平安時代後期あたりから次第に「歌仙（和歌の上手い人）」という言葉が定着していく、文学史的な流れをとりあげた。

第二回からは、藤原公任による「三十六歌仙」に選ばれている歌人のほとんどは中堅の地位にある専門歌人で、高位の貴族や社会的地位の低い歌人は含まれていなかったこと、時代が下がるとともに和歌の文化的・文芸的地位が上がり、身分にかかわらず、勅撰集に選ばれる歌数や純粋な歌の評価によって歌人が選ばれるようになっていくこと、「歌仙絵」がどのように生まれたかなど、「歌仙」の歴史と変遷についてお話が進み、その中では、歌人達の気持ちや社会状況なども、当時の逸話や文献などによって生き生きと紹介された。

また、さまざまな「三十六歌仙」が選ばれるようになると、様々な書体や散らし書きも生まれ、それらを鑑賞する新たな文化も生まれていったこと、このような雅な世界が江戸時代には庶民へも拡がっていったことが、手銭家資料から分かる、というお話もあった。

受講者方からは、アンケートに載せた感想に加えて、お話の面白さ、毎回準備される資料の丁寧さ、お人柄など、講師である野本先生に感謝する感想と、へ野本先生の講座の継続を望むという意見が多く寄せられた。

今年度も、予習が出来るよう毎回、次回



講座に該当する資料画像を配布した。

【使用した資料】

古今和歌集

三十六歌仙画帖

三十六歌仙屏風

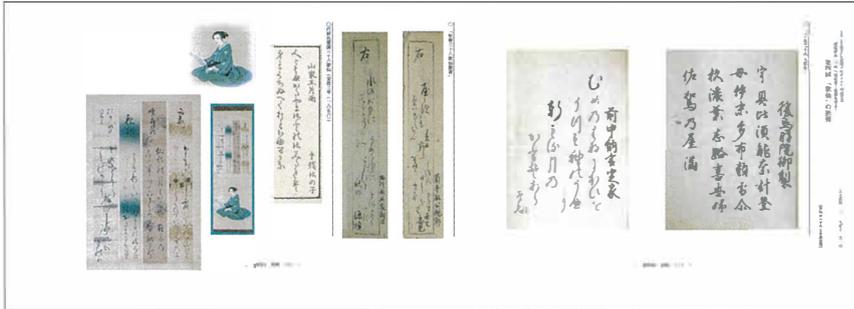
百人一首折り帖（近衛信尹 筆）

中古三十六人歌合写本

短冊三十六歌仙散書

丙辰出雲国三十六歌仙（安政三年）

手銭さの子肖像



■連続講座「古典への招待」アンケート

◇回答枚数26枚

◇参加人数(のべ)84人

| Q1.どのようにして今日のイベント・ワークショップを知りましたか？ | | | | | |
|---|-----------|-----------|--|----------|-----|
| チラシ | ウェブサイト | 友人から | 関係者の紹介 | Facebook | その他 |
| 10 | 1 | 2 | 11 | 0 | 1 |
| Q2.イベント・ワークショップはいかがでしたか？ | | | | | |
| とても良かった | 良かった | どちらともいえない | 良くなかった | 無回答 | |
| 24 | 2 | 0 | 0 | 1 | |
| Q3.本日の内容は理解しやすかったですが？ | | | | | |
| よく理解できた | おおむね理解できた | どちらともいえない | 一部わからなかった | 理解できなかった | その他 |
| 13 | 13 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| Q4.次回以降の講座についてご希望をお聞かせ下さい | | | | | |
| 講座について | もっと専門的な内容 | おなじ程度 | もっと分かりやすく | その他 | |
| | 1 | 22 | 1 | 0 | |
| 内容について | くずし字を読む | 作品内容を深く知る | 両方 | その他 | |
| | 8 | 14 | 1 | 0 | |
| Q5.感想、今後の企画についてご意見・ご提案など | | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・和歌史の面白さが印象に残った。 ・三十六歌仙和歌の時代経過の流れが分かりやすかった ・資料が充実していて親切 ・少しずつだが、崩し字の魅力についてわかってきた ・珍しいテーマの講座で知的な刺激を受けた ・学生時代に帰った気分で、当時教わらなかった深い部分まで知ることができ新鮮だった ・旧家に伝来する資料が公開されることに意義を感じる。 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・分かりやすい講座だったので続けて欲しい ・所蔵資料を活用した講座 ・和歌についてもっと知りたい ・古典文学作品を継続して読む講座を希望する ・百人一首や西行について ・作品の背景や社会情勢も交えたお話が聞きたい ・どんな講座でも参加したい | | |

【小学校でのワークショップ】 能狂言を体験してみよう！

大社町内の小学校に出向き、6年生を対象に行っているワークショップ。能楽師の声や所作、音を身体で感じ、実際に動き声を出して、能や狂言を体験しながら、能や狂言の歴史、特徴、表現なども知ってもらおう。

講師 安田登（能楽師 下掛宝生流ワキ方）
奥津健太郎（能楽師 和泉流狂言方）

■ 大社小学校

開催日 十月十二日 午前
参加者 四十五名（6年生）

能と狂言の違いとして、女性や鬼の面を比較してみる。またそれぞれの喜怒哀楽の表現の違いを実際にやってみて、そこから、能と狂言が表現している世界の違いについて知ってもらう。その後、狂言「盆山」を鑑賞。



■ 遙堪小学校

開催日 十月十二日 午後
参加者 十七名（6年生）

遙堪小学校では、近々行われる成果発表会で、能・狂言に関する発表をする予定があるということだった。そこで後半は、大社小学校よりも少し踏み込んだ内容のワークショップとなった。

まず、「白」からイメージされる言葉とし

て生徒たちから出た「大根」を冒頭に置いて、連想する言葉を生徒達が繋げていく。その後、音数を整えて調子をつけ、即興の謡をつくって節をつけて謡った。

また、「盆山」にある塀を壊す時の音や仕草、動物の鳴き声や仕草を実際にやってみた。「盆山」には、犬と猿の鳴き声と仕草が出てくるが、それ以外にも牛や馬、そして、最後は蚊を教わり、全員が蚊になって飛び回る楽しいワークショップになった。

【大社 能を知る集い】

能と狂言の世界／事始めから未来までⅡ

現代では高尚で難解な芸能と思われがちな能楽を、江戸時代のようにもっと身近に、自由に楽しむための入り口になれば、という趣旨で行っている能楽ワークショップ。

開催日 十月三十一日（木）

十七時四十五分～二十時

講師 安田 登（能楽師 下掛宝生流ワキ方）

梶宅 聡（能楽師 森田流笛方）

奥津 健太郎（能楽師 和泉流狂言方）

会場 手銭記念館第二展示室

参加者 二十名

まず、梶宅さんによる笛で始まった。





その後、〈神・男・女・狂・鬼〉という能の番組構成の決まりと、能と狂言が交互に演じられる意味についてお話があり、『高砂』に出てくる神へと続く。

よく祝言として謡われる「高砂や、」のくだりについて、言葉を掛けながら景色を移していく言葉の技法の解説とともに、景色を想像しながら謡う楽しさについても詳しくお話があり、実際に謡ってみる。

次に、『古事記』を題材に、神と人との関係が、『古事記』の中でどう変わっていったのか、「神（か・み）」「命（み・こと）」という音からひもときながら、日本人の「死」に対する考え方へと話は移る。

「死」に対する「生」として、『古事記』の冒頭、天地誕生へと話は広がり、そこで用いられている「成れる」という言葉が、「自然にできてくる」という意味を含んでいることや、神の名に用いられる文字の意味についての解説があり、実際に『古事記』のその部分を皆で読んでみた。

そこから、日本の天地創造に対して、旧約聖書ではどう書かれているのか、旧約聖書『創世記』から天地創造の部分へブライ語で読むという、予想外の流れとなり、それぞれの自然も影響しているであろう違いにも言及されることで、改めて日本の湿潤な空気を『古事記』から感じることもなった。最後に、再び槻宅さんの笛の演奏があり、幽玄な雰囲気の中、終了した。

今回は、能について知っていただく前半と、能と通して他の世界を覗き見る後半、二つのワークショップといった趣だった。



■大社 能を知る集い

◇回答枚数18枚

◇参加人数20人

| Q1.どのようにして今日のイベント・ワークショップを知りましたか？ | | | | | |
|--|-----------|-----------|--|----------|---------|
| チラシ | ウェブサイト | 友人から | 関係者の紹介 | Facebook | その他 |
| 2 | 0 | 3 | 4 | 6 | 1(毎年参加) |
| Q2.イベント・ワークショップはいかがでしたか？ | | | | | |
| とても良かった | 良かった | どちらともいえない | 良くなかった | 無回答 | |
| 13 | 5 | 0 | 0 | 0 | |
| Q3.本日の内容は理解しやすかったですか？ | | | | | |
| よく理解できた | おおむね理解できた | どちらともいえない | 一部わからなかった | 理解できなかった | その他 |
| 12 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| Q4.ご感想をお聞かせ下さい | | | Q5.今後どのような企画に参加したいですか | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・興味深く楽しかった ・毎回新しい何かを知ることができるので、わくわくする ・子供たちにも体験してほしい ・気楽に能の世界に触れたいという思いを強く持った ・古事記について未知の事柄が多くおもしろかった ・番組構成のルールの説明がとてもわかりやすかった ・最初と最後で、見え方、聞こえ方が全然違った ・五感を刺激される楽しい講座だった。内容も理解しやすい ・日本古来の文化を正しく伝える事の大切さを感じた | | | <ul style="list-style-type: none"> ・平家物語などを取り上げて欲しい ・もう少し実技をしたかった ・鳴り物についてもっと知りたい ・出雲学と関連する内容 ・謡をしっかり謡いたい ・能の小道具について | | |

【料理ワークショップ】

江戸のおもてなし料理

江戸時代の献立を再現することを通して、日本料理ならではの食材や調理法を伝える事、伝統的な器の良さ知っていただくこと、江戸の生活や文化に興味を持っていただくことを目的としたワークショップ。

開催日 十二月六日(金)

十時～十四時

講師 安藤登(日本料理 登わ)

会場 大社コミュニティセンター

参加者 調理 十一名

試食 十五名

■ 献立

焼物

鯛

摺り生姜

いり酒

味噌汁

牡蠣しんじょ

チシャトウ

椎茸

平椀(葛引)

大黒シメジ

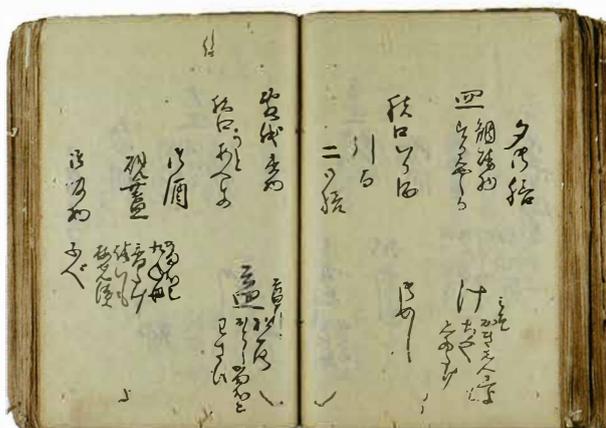
おとし蒲鉾

わさび

坪 人参白和え

御飯

硯蓋(取り廻し)



香茸

氷こんにやく

牛蒡※

焼豆腐※

※こくしょう

香物(取り廻し)

奈良漬

津田蕪浅漬

今回は、試食のみの応募がなく、全員が調理から参加ということになった。

取り上げたテキストは『万日記 五番』から選んだ、寛政元年(一七八九)十一月四日、出雲大社参詣のために松平駒次郎(衍親・三助とも。松江藩七代藩主・松平治郷《号 不昧など》の弟。俳号 雪川)が大社を訪れた際、宿舎となった手銭家で準備した食事の献立である。

『万日記』には、本来は大社での宿泊予定はなく、また当番の家でもなかったが、急に回ってきた、と書かれているので、急遽揃えられる地元食材ばかりを用いた献立だっただろうと考えられる。

旧暦の十一月という、ちょうどワークショップを行ったのと同じ時期だが、松露、ちき、氷こんにやくなど、今では店頭には並ぶことのない食材も多い。せっかくなので色々探したところ、氷こんにやく、ちき(チシャトウ)は取り寄せることができた。松露は調達できなかったが、当時の献立にはよく出ていることから、松林の多い大社では、割と手に入りやすい材料だったのではないだろうか。

また、「こくしょう」については、江戸時代の料理本に「濃い味噌汁」と「練り味噌」の二つがあり、文書に記述されている器から、今回は練り味噌だろうと予想した。どのような味噌を使ったのが問題だが、当時は味噌も自前で作っていたはずで、大豆と塩のみで作る八丁味噌も作っていたので



はないかと考え、八丁味噌を使った。

これまでのワークショップでは、試食のみ参加した方達から説明不足だ
というご意見をいただくことがあったが、今回は全員調理から参加だっ
たので、食材の説明も調理のコツや流れも、全員に分かっていただけことは、
逆に良かったと言える。

チシャトウは、美しい翡翠色とさつくりとした歯触りがとても印象に残っ
た。氷こんにやくの調理方法は、もう少し工夫する必要があるだろう。

チシャトウも氷こんにやくも、当時の献立にはよく出てくる食材だが、
今では全くといっていいほど出回っていないので、参加した皆さんにとっ
ても珍しかったようだ。



■料理再現ワークショップ

◇回答枚数 9 枚

◇参加人数 11 人

| Q1.どのようにして今日のイベント・ワークショップを知りましたか? | | | | | |
|--|-----------|-----------|---|----------|-----|
| チラシ | ウェブサイト | 友人から | 関係者の紹介 | Facebook | その他 |
| 1 | 0 | 2 | 3 | 1 | 1 |
| Q2.イベント・ワークショップはいかがでしたか? | | | | | |
| とても良かった | 良かった | どちらともいえない | 良くなかった | 無回答 | |
| 8 | 1 | 0 | 0 | 0 | |
| Q3.本日の内容は理解しやすかったですか? | | | | | |
| よく理解できた | おおむね理解できた | どちらともいえない | 一部わからなかった | 理解できなかった | その他 |
| 5 | 4 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| Q4.ご感想をお聞かせ下さい | | | Q5.今後どのような企画に参加したいですか | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・段取り通り時間内にすべて終わり良かった ・器が美しい ・チシャトウ、氷こんにやくは初めて食べた。 ・細かい所まで見ることができ、教えてもらえて良かった ・これまで適当に作っていた「いり酒」分量がよくわかった ・日本料理の奥深さを知る良い機会になった ・江戸時代にこれだけのごちそうがあったことに感動した | | | <ul style="list-style-type: none"> ・このような講座ならまた参加したい ・江戸を追体験できるような講座 ・菓子について | | |

【古文書解読講座】

古文書を初歩から学ぶ講座。

解読の成果は、島根大学附属図書館アーカイブを通して、ADECシステム上で史料画像と共に公開する。

開催日 平成三十一年四月～令和二年三月
 毎月第二木曜日 午前十時～十二時
 講師 松本 美和子
 会場 大社文化プレイスうらら館会議室
 募集 二十名

【使用した史料（解読順）】

伊能忠敬関連文書

- 寅六月杵築明細帳（文化三年）
- 文化三年六月二十四日天文方御越之節諸飛脚雇人書出し帳
- 寅六月天文方諸入用追仕出し月行司払扣
- 寅八月天文方并御見分御越之節下宿賄仕出し帳（一部）
- 文化三年寅六月天文方御越之節仕出し残り分書出し
- 兼本半兵衛関連文書（受講者から提供された関連史料）
- 文化二年御用留「手配之覚」



手銭家には文化三年、十一年の二回、全国を測量して回っていた伊能忠敬一行が宿泊しており、前年に藩から通達された文書、測量や宿泊に必要な費用を書いた仕出し帳、伊能からの問いに備えて準備したと思われる杵築の人口や寺社数などを記した明細帳など、三十点あまりの文書が伝えられている。

講座では、初心者の人たちに古文書解読の基本から身につけていただく

ことを目的とし、比較的わかりやすく書かれた「寅六月杵築明細帳」から始めて、皆さんの様子を見ながら次のテキストを決める、という方式で進めることとした。

とにかく古文書を読めるようになってもらいたいということで、出席者の中から、毎回数人が当てられ読まされるため予習が欠かせず、皆さん大変だったと思う。

実際、初回の参加者は二十九名と予想以上の滑り出しだったが、夏までに二十名ほどになった。このまま十名以下にまで減ってしまうかもしれないと少々悲観したが、予想を超えて十五名程度の方が最後まで参加してくださり、一年間で七点の史料を読み進めた。

講師の松本美和子さんは、古文書を読む心構えとして

史料によっては虫損や汚れ、書き手の癖などによって分からない部分があるが、憶測と思い込みで読むのではなく、いさぎよく不明なままに空けておくこと。

地名や人名を始め、当て字が使われていることが多い。また、誤字も思いのほか多いので、現代の感覚ではそこに引っかかってしまうが、そういうものだとおおらかに読み進めること。

この二点を何度も繰り返し述べられ、毎回、古文書に頻出する用語や略字、古文書特有の漢文的言い廻し、崩し字の書き方といった知識だけでなく、史料に出てくるさまざまな事柄（時間や距離の単位や決め方、社会構造、松江藩の階級制度、記載された人々についての情報など）についても、丁寧な説明が加えられた。

仕出し帳は単なる項目と費用の羅列だと思っていたのだが、解説や説明が加えられた

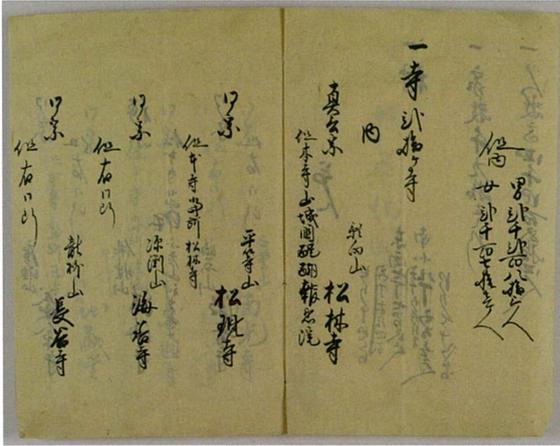


ことで、江戸時代の生活と社会が活き活きと見えてくる。

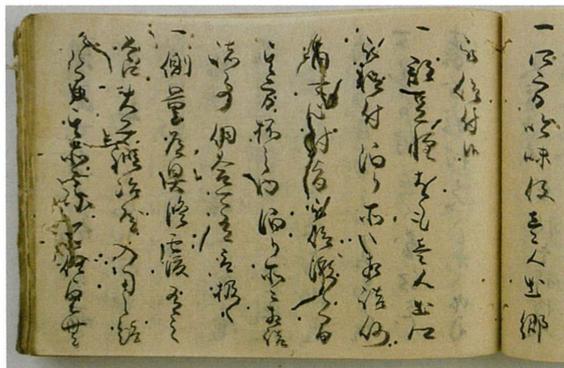
どこで草鞋を買っているのか、食費込みの宿泊料に差があるのは何故かなど、背景や理由にも考えは拡がり、現代の金額と比較することで、様々な経費や人々の日給も、リアルに感じられる。

数字の横に添えてある、内訳や備考のような一言から、思いがけない心の動きが感じられる事もあり、次第にこういう史料の面白さも分かってきた。

この講座は一年で終了するが、参加した方達の強い希望により、次年度は皆さんによる自主講座として継続することになり、テキストには、引き続き手銭家文書を提供することとなった。



寅六月杵築明細帳



文化二年御用留

■ 古文書解読講座アンケート

◇回答枚数10枚

◇参加人数のべ150人

| Q1.どのようにして今日のイベント・ワークショップを知りましたか？ | | | | | |
|--|-----------|-----------|--|----------|-----|
| チラシ | ウェブサイト | 友人から | 関係者の紹介 | Facebook | その他 |
| 3 | 0 | 3 | 4 | 0 | 0 |
| Q2.イベント・ワークショップはいかがでしたか？ | | | | | |
| とても良かった | 良かった | どちらともいえない | 良くなかった | 無回答 | |
| 10 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| Q3.本日の内容は理解しやすかったですか？ | | | | | |
| よく理解できた | おおむね理解できた | どちらともいえない | 一部わからなかった | 理解できなかった | その他 |
| 4 | 5 | 0 | 1 | 0 | 0 |
| Q4.ご感想をお聞かせ下さい | | | Q5.今後どのような企画に参加したいですか | | |
| <ul style="list-style-type: none"> 一年があつという間だった 古文書の難しさと楽しさを名調子で学ばせてもらった 全くの初心者には難しかったかと思う 分からなかった事が分かっていく楽しさを感じた 高校の古文がこういう授業だったら居眠りしなかったと思う 伊能忠敬の測量に対して地方がどのように準備、対応したかがよくわかった 虫食いのある文書は非常にわかりにくかったが、いかにも古文書を読んでいるような気持ちになった 古文書が読みたいと思っていたのでいきつけになった 時代背景や文化も勉強しなければならなかった | | | <ul style="list-style-type: none"> このような講座ならまた参加したい 出雲地方に残っている古文書の判読 教養講座 | | |

【館外展示】

手銭家蔵書から見る出雲の文芸

プロジェクトの成果を広く公開すること、他機関との連携を深めていくことを目的とした出張展示。今回は、江戸時代中期から後期にわたって、大社及び出雲地方でどのような文芸活動がなされたのかをテーマに展示した。

古代出雲歴史博物館では、出雲の文芸の概略が分かる資料を展示した。島根大学附属図書館では、江戸時代を通じた文芸活動の流れを示すとともに、九月におこなったシンポジウムでも取り上げられた新出の一枚摺や書状もなるべく展示し、調査研究の成果が来館者に伝わるよう努めた。

【主な展示作品】

『追善華鬘粟』

『夢路農葉桜』

『手曳能萬津』

『春帖集』

書状（蘿風、止観、芝山、木佐春声など）

俳諧一枚摺

狂歌一枚摺

和歌、発句詠草

『百人一首聞書』

『蕉門誹諧大意 ふもとの塵』

『落柿舎遺稿続篇突』

『落柿舎遺稿発句十五篇』

『蕉門誹諧極秘聞書』

『葡萄棚』

点印、蔵書印など



会場 島根県立古代出雲歴史博物館常設展示室展示ケース（三十点）
期間 六月十二日～八月五日（入館者数 不明）



会場 島根大学附属図書館企画室（百二十点）
期間 二〇二〇年一月十五日～二月十四日（入館者数 四五〇名）



■ 館外展示ポスター

出雲文化活用プロジェクト 企画展示

江戸カ

～手銭家資料コレクション～

手銭家蔵書

から見る

出雲の文芸

資料から再発見する江戸の底力
江戸時代、出雲大社と稲佐の近を結ぶ「神迎えの道」沿いで商家を営んでいた手銭家には、書画や工芸品だけでなく「おみくろの文芸資料」も伝わっています。

その研究を通じて見えてきたのは、和歌や俳諧など文芸活動に熱心に取り組む、これまで知られていなかった大社の人々の姿です。江戸時代の大社の町で行われていた、どこにもまよがない、豊かに活気に満ちた文芸活動をご紹介します。

2020年1月15日(水)より 2月14日(金)まで
休館日：1/18,19, 2/8, 9, 11

島根大学附属図書館 1F 地域コミュニティラボ
(松江キャンパス) 入場無料

主催：出雲文化活用プロジェクト
公益財団法人手銭記念館 / 島根大学附属図書館 / 島根大学法文学部山陰研究センター
お問い合わせ 島根大学附属図書館 TEL 0852-32-6086
手銭記念館 TEL 0853-53-2000

*出雲文化活用プロジェクト
手銭家所蔵資料の調査研究、整理、デジタル化を進め、その成果を公開することによって、江戸時代における出雲大社周辺地域の生活文化や文芸活動の歴史を広く地域市民と共有することを目的として、(公財)手銭記念館、島根大学法文学部山陰研究センター、島根大学附属図書館が連携して立ち上げたプロジェクトです。2014年度から毎年文化庁等の助成を受け、事業を進めています。

アウトリーチ 館外展示

■ 島根大学附属図書館でのアンケート

◇ 回答枚数13枚

◇ 来場者450人

| 年代 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代以上 | |
|---|--------|-------|-----|---|------|-----|-------|-----|
| | 1 | 0 | 2 | 2 | 3 | 0 | 5 | |
| 居住地 | 松江市内 | 県内 | 県外 | 区分 | 学生 | 職員 | その他 | |
| | 9 | 4 | 0 | | 1 | 5 | 7 | |
| 来場目的 | 展示 | 図書館利用 | その他 | この企画展を何で 知りましたか？ | 学内掲示 | HP | 新聞 | その他 |
| | 7 | 7 | 0 | | 9 | 1 | 3 | 1 |
| 展示内容について | 大変良かった | 良かった | 普通 | 良くなかった | | | | |
| | 10 | 3 | 0 | 0 | | | | |
| 印象に残った展示 | | | | ご意見・ご感想・今後の希望 | | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・さの子さんの資料 ・江戸時代一枚摺のシステムが興味深かった ・デジタルアーカイブ ・一枚摺 ・一枚摺の版木や蔵書印、点印など通常の展示ではなかなか見られないもの ・古い資料 ・和歌添削帳 ・誓状 | | | | <ul style="list-style-type: none"> ・文芸資料の多様さがよくわかる。人名録などどう使っていたかがわかるのもおもしろかった ・近世俳諧系譜があったおかげで理解もしやすかった ・内容が読める様になるといいのですが!! ・地元の資料、作品ということでも面白く拝見した ・今後も様々な資料を発掘、紹介してほしい ・地域における俳句・和歌の広まりは学ぶ機会が少ないのでとても新鮮で、勉強になった | | | | |

【論考】

杵築歌壇資料が語るもの

—和歌史の見直しのきつかけとして—

久保田啓一

(広島大学大学院文学研究科教授)

はじめに

手銭家歴代当主が和歌と関わりを持ち、周辺の和歌愛好者とともに杵築歌壇を組織して活発に活動を展開した事実については、二〇一四年に行った手銭記念館所蔵和歌資料の調査を元とする講演とシンポジウムで概略を述べ、その成果を基礎として近世和歌研究の立場から見解(注1)を發表して今日に至っている。今回、新たな見地から考察を加えるに際し、先に提示した見通しを簡略に掲げることから始めたい。杵築歌壇史の概略としては次のような項目を挙げるができるのではないかというのが筆者の立場である。

① 手銭家歴代のうち、和歌の愛好ぶりが資料で裏付けられるのは、三代季硯、四代敬慶、七代有頼とその妻さの子の時代である。

即ち、手銭家の和歌活動には、一八世紀後半と幕末の二つの盛期が存在するということがある。

② 季硯には和歌・俳諧・漢詩の書留が多数残されるが、漢詩と俳諧が主で、和歌活動は明和九年頃から本格化した。和歌の師は小豆沢常悦。季硯の弟長康(俳号冠季)や四代敬慶、俳諧の指導者広瀬百羅らも指導を受けている。彼らには漢詩・和歌・俳諧を区別する意識が乏しく、常悦の没後は百羅が和歌の指導にも当たった。

特に、釣月から指導を受け、二条派堂上歌学を出雲に伝えた小豆沢常悦の存在は大きかった。

③ 七代有頼とその妻さの子の和歌の師は中臣典膳であるが、典膳は俳諧・狂歌にも指導力を発揮した。特に、和歌詠草に施す「面白候」などの褒詞を、点取俳諧で用いられる点印そっくりの印鑑に仕立てて捺すなど、和歌と俳諧の位置を完全に一体化させる意識で臨んでいる。

幕末には、和歌・俳諧・漢詩に狂歌が加わり、まさに韻文の各領域を横断するような形で享受されていたことが特筆される。

以上の三点が杵築歌壇の特徴として取り立てられるべきであると、まずは断じてよいのではなからうか。この私見を出発点とし、近世の韻文全体の動向とも関わらせつつ、杵築歌壇をどのように捉えるべきか、その問題の答えを提示するのが本稿の目的である。

一、和歌・俳諧・狂歌の位置づけ

近世文学史の常識として、近世の韻文において、伝統に立脚した雅文学である和歌と新興の俗文学である狂歌・俳諧とは、截然と区別されるべき存在であったとされる。確かに、一八世紀末頃までの近世中期は、古典尊重の価値観が強く、古典主義の立場から漢詩と和歌を重んじ、殊更に俳諧を排斥する発言も見ることが出来る。たとえば、筆者の研究領域に即して言えば、成島信遍が「子姪に俳諧をいましむるふみ」その他で主張する俳諧否定論(注2)は、冷泉家に和歌を学び、古文辞学派の詩文に馴染んだ身としては、当然の選択であったといえよう。また、狂歌は一八世紀後半の安永・天明期に大流行し、寛政改革以降は急速に下火となったとされるが、天明狂歌の中心に位置した大田南畝の関心は、むしろ同時代の江戸の武家歌壇に向けられていたという事実(注3)があり、彼の意識の中では狂歌はあくまでも和歌の周縁に位置していたことを窺わせる。成島信遍と大田南畝は世代を異にしながらも共通する文芸観を身に付けていたといつてよいであろう。

一方では、南畝が俳諧・雑俳に言及する時、和歌と根を同じくする文

芸として、また狂歌と笑いを共有する文芸として、柔軟かつ自在に俳諧を捉えているのも確かである（注4）。ここでの南畝に、生涯を通じて愛好した雅文学の漢詩と比べて、狂歌や俳諧を下等と見なすような視線を見出すのは難しい。雅と俗を峻別する古典主義は、少なくとも南畝の段階では徹底を欠いていたといわざるを得ないのである。

この度、手銭家の資料調査で、三代季硯・四代敬慶の時代から和歌と俳諧が対等に享受されていた事実が浮かび上がり、幕末の七代有輛・さの子の時代には中臣典膳によって狂歌まで指導対象となっていたことが判明した。この現象は少なくとも雅・俗の二項対立的な近世文学観では説明できない。文学史の大きな流れの中の例外として無視しようと思えば可能かもしれないが、資料の存在を抜きにして文学史が構築できるはずもないというのが筆者の立場である。あくまでも具体的に即して意味づけを試みるしかない。

まず、これが出雲の杵築にのみ見られる現象なのか、それとも全国各地に普遍的に見られるのか、ということが問われなければならない。次に、近世中期以降の時代の変遷がどのように作用したか、である。地域と時代の関わりの様相を通して杵築歌壇を客観的に検証し、全国規模での資料検討につながるきっかけを作ることが求められる。杵築特有の事例として相対化の可能性を閉ざしては、問題の解決につながらないであろう。本稿では近世和歌を中心に据え、その享受のあり方に重点を置いて考察する。まずは筆者がこれまでに得た知見に基づく概観を述べるが、論述の都合で和歌以外の漢詩・俳諧・狂歌などに言及する場合があることをお断りしておきたい。

二、時代と地域の問題

近世の伝統的な和歌は、中世の藤原定家以来の歌の「道」すなわち歌道に立脚して学ばなければならず、歌道に身を置くことを願う地下人は、当然ながら伝統を体現する公家（冷泉家、飛鳥井家、中院家、日野家など）

の門人となることが必須であった（注5）。

ところが、一九世紀の近世後期に入る頃には、朝廷と公家達の文化圏が衰退し始め、求心力を失ってゆく。絶対的な宗匠の権威が力をなくすことで、文化の中心に空白が生じる。その空白を埋めるべく活動を本格化するのが、「道」ではなく「学」としての和歌で身を立てようとする人々である。

歌道に身を置く宗匠達も、当然ながら和歌の指導に見合う経済的な利益を求めた。ただし、それは意識としてはあくまでも謝礼の範疇を出ることがない。一方、和歌・歌学の指導をもつて身過ぎの手段とする人々は、同業者同士、顧客の奪い合いを巧みに避けつつ、それぞれの人脈を最大限使って版図の拡大を図る。いささか侘しい気もするが、例えば藩の儒者のような安定した地位を保つ学者が近世後期の和歌・歌学の世界では非常にまれな存在であったことを思えば、生活のかかった彼らが収入源としての顧客確保に一生懸命となるのは至極当然の行いであつたと想定せざるを得ない。周防国岩淵出身の近藤芳樹が、生活の基盤を求めて京・大坂・和歌山・広島などを転々としつつ、和歌・和学の愛好者の要請に応え続ける（注6）のも、学問で身を立てることの厳しさを背負う在野の存在であればこそである。彼らは、まさに伊勢の御師よろしく、守備範囲の顧客の文学的・学問的要求に精一杯応じなければならなかつた。

このような学芸の享受のあり方は、文化の中心である三都と、そこから遠く離れた地域とでは、自ずと様相を異にしたと思われる。三都では、流派ごとに多くの愛好者を束ねる歌壇が存在し、人脈に即した縄張りが形成され、然るべき指導者がそれを継承してゆくのが通例であろう。さらに、詩壇・俳壇や狂歌壇も加わって、極めて多岐にわたる文化圏が重層的に組織される。中には複数の領域を掛け持ちする者もあろうが、それは享受の原動力となる人脈の然らしめるところだつた。

一方、地方では、愛好者は広範囲に分散し、それぞれの地域で小さな文化圏を作る。当然ながら一つ一つの文化圏を構成する人々の数は少な

く、層も薄い。学芸に楽しみを見出すことのできる階層が如何に限られていたか、ということである。和歌であれば歌壇を作り、定期的に歌会を催すことはできても、彼らだけの活動ではおのずと限界がある。作品の添削を伴う指導のできる、学問的に一段上の力を有する師匠が不可欠となるだろう。重宝されたのが中央との人脈を持つ指導者であった。彼らのもたらす情報を喜んで受納しつつ和歌を学ぶことで、第一線の活動ができていたという満足感も得られる。

さらにいえば、学芸・文芸の指導を業とする者が、地方の小規模な文化圏の中で中心的な人物の経済力と人脈を当てにして接触を試みるのは、何も特定の領域に限ったことではなかっただろう。富を背景に教養を希求する豪農や豪商の主人が、和歌も俳諧もそして狂歌も知りたいという要望を持ち、いわばパトロンのような立場で、指導を受けるといいう名目で詩人・歌人・俳諧師・狂歌師の別を問わず援助することに喜びを見出す人物であったとしたら、一芸に秀でてこそ理想的な指導者であるなどという価値観が有効であったとはとても思えない。むしろ援助者の希望に沿って自在に指導を展開することこそが、時代に即した有能な指導者のあり方とされたのだと見るべきかと考える。

三、指導者と門弟の関係

便宜上、和歌に重点を置いて考察を続ける。近世中期までの和歌宗匠と、近世後期に学問として和歌を学んだ指導者とで、異なる点はどこにあるのか。一つは彼らの身分であり、一つは生活の糧としての指導が必然的にもたらす変質である。

公家の宗匠達は、経済的には武士や有徳の町人・農民に依存していたとはいえ、身分上の位置と、「道」を体現する立場の重みにおいて、門弟達を十分にひきつける権威を自ずと身につけていた。門弟は宗匠を前に叩頭し、詠草に施された添削をありがたく拝読する。これが当たり前の師弟関係であった。伝存する多くの詠草の添削例により、伝統歌学を体

現する公家達の指導が門弟の稚拙な作を一変させる様子をふんだんに見せつけられると、指導を受ける門弟達の驚きと宗匠に寄せる鑽仰の念を容易に追体験することができるといえる。高度の指導力とそれに支えられた作品の質の高さが宗匠の権威をますます高めたであろうことは疑いない。

一方、歌学と和歌実作の指導を仕事とし、生活のために門弟を迎えようとする近世後期の指導者はどうであったか。先に述べた通り、国学・歌学・和歌の専門家で幕府や諸藩に召し抱えられる人はほんの数えるくらいしかない。私塾などを開いて門人を呼び込むか、各地方の文学好きの金持ちと人脈を作り、その人脈を頼って諸国を渡り歩きつつ、指導料を稼ぐしかない、非常に不安定な境遇にある人が殆どである。

特に、三都では十分な活躍の場が得られず、顧客の数も限られた地方で可能性を模索する他はない後発の指導者は、身分的・経済的・社会的に立場が上の享受者の意向を汲み、顧客のどのような要請にも対応することが求められるようになる。一般に、学芸の指導者と門人との関係を、現在の教員と学生の間柄と同一視し、人間関係において指導者側の優位を当然と考えるような常識が罷り通っているかのように思われるが、少なくとも近世後期の地方文化圏ではそのような図式は成り立たないのではなからうか。指導者は主人の意を汲んで学芸を以て奉仕していたと見るべきであろう(注7)。

また、近世後期には学書の出版が盛んに行われ、購入して学習すれば一通りの知識を得られるほどに和歌が普及した。和歌だけではない。漢詩も俳諧も入門書・辞書などの工具書から作品集に至るまで、あらゆる便宜が提供されて愛好者の飛躍的な拡大に貢献した。一握りの愛好者が伝授のような形で独占的に宗匠の指導を仰ぐ時代とは全く異なる享受の状況が招来された。和歌の学習に適した著述をものし、それを売り捌きながら愛好者の歓心を買うことが、有能な指導者像の形成に寄与する。求められたのは、指導の質の高さではなく、サービスの周到さときめ細やかさであったといってもよいのではないか(注8)。

四、中臣典膳の存在

以上述べた見取り図は、全国各地に伝存する生の文芸資料の調査を重ね、それぞれに見える人物の意識にできる限り密着することで得られた実感に基づく。各事例を特別のものに見なすのではなく、常に全国規模での相対化を図る必要性を痛感するが、その出発点としてまず、個別の資料群をジャンルの別なく網羅的に調査し、その地域特有の事情を反映するのか、それとも全国各地に類例が見られるのかを判断することが大切である。以上の問題意識を抱きつつ、再び目を杵築歌壇に転じる。「はじめに」の①②については(注1)所掲拙稿で概略を述べたので、本稿では③の中心をなす中臣典膳に焦点を据えたい。

典膳の伝記としては、本田常吉氏「山陰の文人中臣典膳の伝」(注9)がある。享和二年(注10)一月二四日に生まれ、文久二年六月二七年に六一歳で没する生涯を、交友関係や著述を列挙する形で跡付け、「狂歌」・「狂句」・「和歌」・「俳句」・「子孫の歌句」各項に伝存する諸作を並べる。残念ながら記事の根拠が示されず、資料の所在も明らかでないので、論述の拠るところにはならないが、諸国遊歴の後の典膳を、

渠帰郷するや、千家国造家は、特に渠に近習格を与へて厚遇せらる。同時に高禄を与へんとせられしも、渠は固辞して遂に受けざりしと云ふ。然れども渠は主家の殊遇に感激して、遂に出雲大社の権禰宜を拝命し、同時に国造家に出仕し、其の該博なる学識を以て、国造を補佐すると共に、身を捧げて其の子弟を教導し、終世倦まざりしと云ふ。(注11)

と評するところを見ると、出雲大社及び千家家には根本資料が感される可能性が高い。

典膳が諸芸に通じたことについても、

渠は幼名を徳之助と云ひ、後典膳と改む。歌名には初め春定を用ぬ、

後正蔭と改め、稀には正占なる名を用ゐたり。国学者としては秀居又は扶桑園と云ひ、書画易術には素淵、玄鳳、桂隣堂、髻華舎、臥虎園又青蛇蟠雲、閑居張萬子と称し、狂歌狂詩文には残月庵、樹安庵と云ひ、茶枕寝太郎とも呼び、後晩年古史拔足と改む。此の狂名は、渠晩年宿痾の爲め、身体を自由を欠くに至りしに因めるものなりと云ふ。俳諧には半漁者六村と号せり。是れ渠の居村杵築村が、当時六邑に分れ、沿海の三邑漁村なりしに因めるものならんか。

と具体的に言及するなど、著述や作品を渉猟しなければ成し得ない記述となつている。

さて、その典膳であるが、近世末期の手銭家七代目有頼及び妻さの子と密接な関わりを有したことが、手銭記念館所蔵の資料で具体的に知られる。そのいくつかを掲げつつ検討を加えてみよう。

まず、有頼・さの子と典膳の間でやり取りされた書状原簡を卷子本に仕立てた二巻がある。巻頭に「ゆづり葉」と題し、「半漁翁六村」の署名と「古史翁」の印を有する方は有頼典膳書状を収め、もう一巻はさの子詠の狂歌や書状に典膳が褒詞・添削を加えて返却したものを張り継ぐ。面白いのは両巻とも恐らくは典膳の色刷の自画像を巻頭に置いてあることで、典膳夫婦に贈られた歳旦用の料紙であったかと推測される。さの子向けを翻字して掲げる。



「六村」(印)

歳旦

武隈の二木の松を門にたて、
まづ年神に三木をさぐげむ
せいぼ

借錢の測にもあらずせにもあらず
ながれ渡りのとしのくれ哉

家の柱に書つけゝる
つらに毛のはえぬ斗の儉約を

いぬより寅の暮まではせむ
還曆

吾よはひ無尽蔵とやいはゝまし
赤壁に似た壬戌のはる

世人予を多能也といひし
も、つらく省みれば

皆石臼芸にして、自慢の鼻をれて挽木の
如し。されどまけぬ氣にて

八人と笑はゞわらへ老衆は
月によつたり花によつたり

古史拔足 「古史翁」(印)

「武隈の」歌は、陸奥の武隈の二木の松に、数え歌の修辞として定着する三木を続け、さらに「三木」に「御酒」を掛ける。「借錢の」歌は、「借錢の測」なる成語をもとに、「測」「せ」と縁語関係にある「ながれ」「渡り」を織り込んで、不安定な世渡りを嘆く一首にまとめ上げる。「つらに毛の」歌は、人間性を失わないぎりぎりの線で、儉約を戌の新年から寅年まで続けようと誓ってみせる。「吾よはひ」歌は、典膳の伝記資料としてみず注目さ



れる。「壬戌のはる」の「壬戌」は文久二年。この年六十一の還暦を迎えたのだから、生年は享和二年に定められる。元豊五年壬戌の蘇軾「前赤壁賦」に見える「無尽蔵」の語を手繰り寄せ、唐土と日本、雅と俗の境界をやすやすと飛び越えて蘇軾の境地との一体化を図る。「八人と」歌は、何でも器用にこなすが荒っぽいことをけなす「石臼芸」から始め、石臼の挽木を折れた鼻にたとえ、ほぼ同義の「八人芸」の「八人」に「はつたり」を、「よつたり」に「寄つたり」「四人」を掛けるといふ凝った修辞を展開している。

勿論、狂歌であるから、典膳自身の思いが率直に表出されているなどという評価を安易に繰り出すべきでないのは当然ながら、還暦を迎え、大社の権禰宜に任せられる一方、多種多様な文芸の指導にも従事しながら、経済的には必ずしも恵まれないおのれの境遇に対する思いが全く反映されていないとも断じるわけにはいかないだろう。

特に注目されるのは最後の一首である。器用な指導者として重宝されつつも、そのような自己のあり方に自虐を織り込まずにはいられない、しかし一方ではそれでもいいじゃないかと「まけぬ氣」になるといふ典膳の二面性、その間で揺れる微妙な心のありようが、洒落のめす修辞の中に浮かんで来るようだ。

続いてさの子の狂歌に典膳が褒詞を加えた詠草が来る。冒頭の一首は「狂歌三節」題。

白もたぬ賤が伏家も

年暮れて世につき交る

餅搗の声 おもしろく候

白のない貧家においても年の暮れには世間並みに餅搗が行われるとの意で、四首あとの「歳暮狂歌」題の「日かげもる賤が伏せ家も年くれて世をしり顔に餅搗の声」とほぼ同趣旨の内容を持つ。題を異にするのでさの子の意識としては別の歌なのだろうが、詠作の場に即して考えれば、「白もたぬ」歌は「日かげもる」歌の改作と見るべきで、「つき交る」に

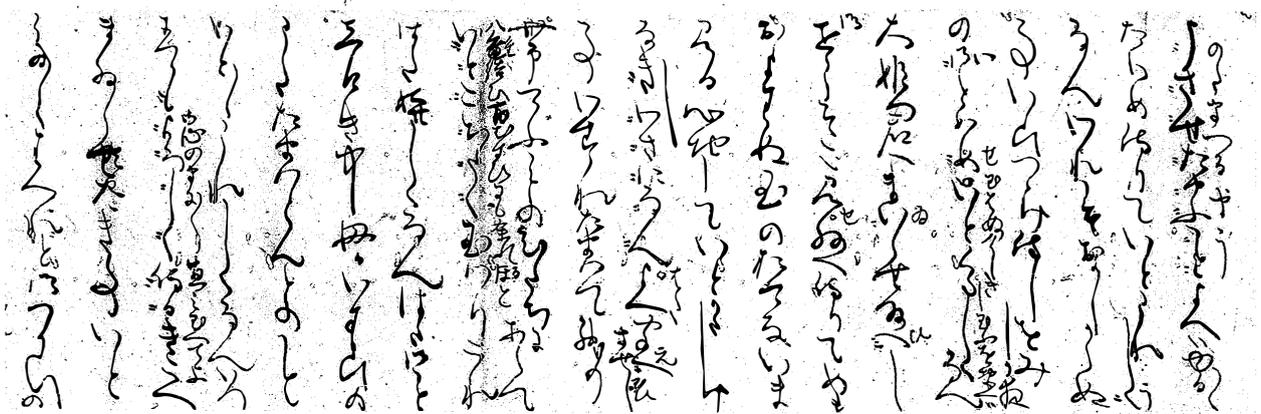
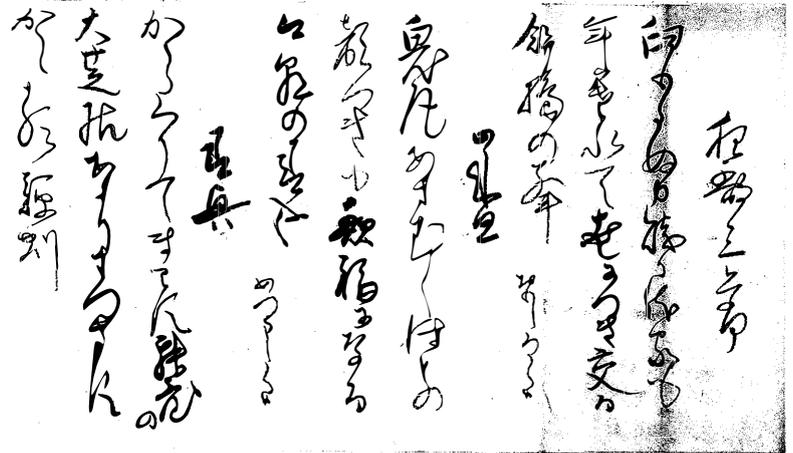
餅搗の様子と世間並みに行いたいという希望とを掛けたことで生まれる滑稽を先に立てて典膳の指導を仰いだのだと推察する。

さらに、内容以上に注目されるのが、「狂歌三節」題と「おもしろく候」の褒詞を有する点である。いうまでもなく「三節」は俳諧に用いられる素材であり、「おもしろく候」は点取和歌の褒詞として最も一般的な言葉である。この二つを狂歌に使用する典膳には、当然ながら和歌・俳諧・狂歌を区別する発想がなかった。そしてこの事実は、雅俗の境界を念頭に浮かべることなく三つの韻文を一体のものとして享受する杵築文化圏の特質を象徴するといつてよいのではなからうか。

五、典膳の指導

狂歌詠草に続くのは、さの子の典膳宛書状に典膳が添削を施して返却した原簡群である。例として一通目を掲げる。添削前の形で本文を出し、添削の箇所を(一)のように注を付して、どのように添削されたかを、「(一)申させたまふごとく」のたまへるやう」のように示す。句読点・濁点などを補い、疑問の箇所には(ママ)を付けた。

申させたまふごとく(一)ハ、よづはゆるくたいめ侍りていとうれしく(二)



なん。われこそおかしからぬ事いひつゞけ侍しを、みじか夜の御とはめ(3)いとくるしくなん。大姫君へまい(4)らせ給へ(5)しせうそこ(6)見(7)給へ侍りて、めもおよばぬ玉のおてな(ママ)いま見る心地して、いとかたじけなきわざになん(8)。よべ聞へさせし(9)事わすれたまはで、残の帯てふもの、ひたちにあらずいどこちたく(10)玉はり、これは嬉しくなん。はた御ことしげき中、母がいはひのうたまはらんとのこと、いとくうれしくなん。いつにてもよろしく侍る(11)。きこへまぬらせたき事いと多くはべれど、御つかひのいそがせ給ふもくるしく(12)返事もたいめの折をまつのみになん。あなかしこ
さみだれふつか
尚々はづかしながら御返事申上候。
どぶぞくこれよく御直し被下
度、頼上まいらせ候。かしく。

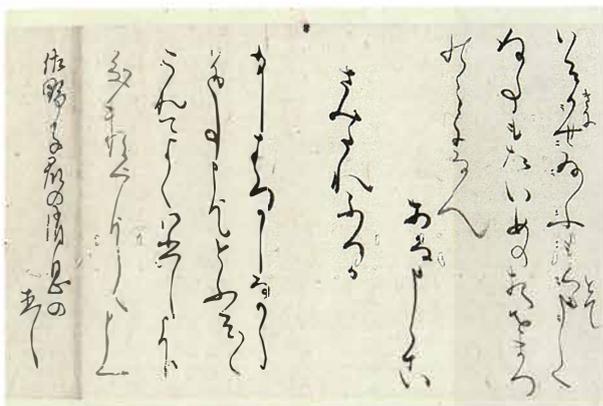
佐野子君の消息の直し

- (1) 申させたまふごとく↓のたまへるやう
- (2) うれしく↓うれしう
- (3) 御とはめ↓いとほせ玉はぬけしきし玉をとおもへば

- (4) まい ↓ まぬ
 (5) 給へ ↓ 給ひ
 (6) せうそこ ↓ 御せうそこ
 (7) 見 ↓ 見せ
 (8) かたじけなきわざになん ↓ かたじけなし
 (9) よべ聞へさせし ↓ はたよべ聞えさせ玉ひし
 (10) いとこちたく ↓ 八重結び百むすびにも余れるほど
 (11) よろしく侍る ↓ 御心のまに ↓ 恵み玉へてよ
 (12) いそがせ給ふもくるしく ↓ いそぎにとて

書状本文はさの子の筆、行間に典膳が添削を加える。尚々書は典膳に書状の添削を依頼する文面で、末尾の「佐野子君の消息の直し」は典膳が心覚えに記したものと解せる。二ヶ所に付した(ママ)のうち、「御とはめ」は語義不明、「玉のおてな」は恐らく「玉のうてな」の誤りか。先に言及はしなかつたが「狂歌三節」の次の狂歌(題「歳旦」)に「鬼瓦あざむくほどの顔つきも歌福になる今朝の春哉」があり、「歌福」は歌意から判断すると「お多福」のことと見るほかはないので、さの子は、「うてな」を「おてな」「おたふく」を「うたふく」と音で覚えていたのかもしれない。

さて、典膳の添削に目を転じる。さの子の原文に見える問題点としてまず挙げられるのは、待遇表現や敬語の不備であろう。(1)(3)(5)(6)(9)(12)などがそれに該当する。また、(10)や(11)のように、相手



に対して失礼な表現を無頓着に採用するのも、古典語をもって消息を綴ることに慣れていないさの子の学力不足ゆえである。(2)(4)(7)は語法や仮名遣いの訂正。(8)はあまりに係助詞「なん」を多用するのを避けたかったか。

こうして見ると、さの子の古典語運用能力は決して十分な水準にはなく、典膳によって一字一句点検してもらう必要があったことがわかる。典膳への要請は、和歌・俳諧・狂歌の実作指導にとどまらなかった。雅語をもって綴る文章の添削は、和学の世界に入るのに不可欠の階梯としてさの子が強く望んだ指導だったのだろう。特定分野に強い思い入れを持つ専門家志向の指導者には不可能だった。典膳のような人物こそが、初心者領域にようやく足を踏み入れたばかりのさの子にはうってつけだったということであろう。

おわりに

有頼とさの子を包括する近世末期杵築歌壇の一特徴を、中臣典膳という人物を通して見てきた。和歌・俳諧・狂歌の別なく愛好する文化圏の成立が、時代の推移によるものなのか、それとも地方ならではのものなのか、という問題の解決は難しいが、見通しのきつかけだけは得ておきたい。そのためには、個別の資料群を網羅的に調査し、歴史史料と一体のものとして位置づけ、さらには画像や翻刻の形で公表して、全国の研究者に知見を求めることが何よりも大切である。島根大学と手銭記念館との協同による資料の公開を画期的なあり方として評価しつつ、今後の作業の継続を期したい。

注

- (1) 詳しくは、拙稿「手銭家歴代の和歌活動―歌壇史上の意義を中心―」(出雲文化活用プロジェクト編『手銭家資料を活用した江戸

時代の出雲文化の発掘と再生事業」、公益財団法人手銭記念館、二〇一五年三月三十一日）、及び「シンポジウム 江戸力く手銭家蔵書から見る出雲の文芸」（同上所収）の筆者による発言を御参照頂きたい。

(2) 拙稿「成島信遍の対俳壇教訓」（『雅俗』第五号、一九九八年一月一〇日）参照。

(3) 拙稿「大田南畝と江戸歌壇」（『文学』五五巻七号、一九八七年七月一〇日。拙著『近世冷泉派歌壇の研究』（翰林書房、二〇〇三年二月二十八日）に収録）参照。

(4) 拙稿「蓼太詠「高き名の」狂歌と南畝撰「蓼太集序」をめぐって」（『表現技術研究』創刊号、二〇〇四年一〇月一日）、同「詩歌連俳と狂歌・川柳の位置―菅江と南畝に即して」（『国文学 解釈と教材の研究』五二巻九号、二〇〇七年八月一〇日）に触れている。

(5) このうち、冷泉派歌壇については拙著『近世冷泉派歌壇の研究』において近世中期以降の概観を掲げている。

(6) 拙稿「近藤芳樹の活動拠点としての広島」（『国文学攷』二二八号、二〇一三年六月三〇日）参照。

(7) (注6) 所掲拙稿で触れた近藤芳樹が援助を受けた周防国大道の大庄屋格上田堂山などは、その典型といつてよい。広島近世文学研究会「鯉城往来雑纂（二十一）」（『鯉城往来』第二〇号、二〇一七年一月三〇日）より掲載を開始した堂山宛来簡群では、頼杏坪を始めとする詩人達との交流も跡付けられ、上田家の富に学者・文人が吸い寄せられてゆく様を窺うことができる。

(8) 佐々木弘綱や橘曙覧なども同類と見てさしつかえあるまい。拙稿『明治開化和歌集』抄注覚書（久保田啓一・櫻井武次郎・越後敬子・倉田喜弘校注『新日本古典文学大系明治編4 和歌俳句歌謡音曲

集』（岩波書店、二〇〇三年三月一日）所収）、同「志濃夫廼舎歌集解説」（鈴木健一・進藤康子・久保田啓一共著『和歌文学大系74 布留散東 はちすの露 草徑集 志濃夫廼舎歌集』（明治書院、二〇〇七年四月二十五日）所収）参照。

(9) 刊記に「著作者兼発行者 杵築協会長 本田常吉」とあり、一九三〇年七月四日印刷（中島活版所）、同一三日発行の一枚刷り（活版）である。手銭記念館の佐々木杏里氏より複写の恵を受けた。

(10) 原本では「享化二年」とするが「享和二年」の誤り。

(11) 通行の字体に改め、句読点・濁点を適宜補う。

プロフィール

くぼた けいいち（広島大学大学院文学研究科教授）

一九五九（昭和三十四）年十月十三日、福岡県大牟田市生まれ。

九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士（文学）。

有明工業高等専門学校講師、梅光女学院大学文学部講師を経て現職。

専門は近世文学、特に冷泉家とその一門を中心とした近世和歌研究、江戸幕臣文化圏研究など。

主著 『新編日本古典文学全集』73 『近世和歌集』（小学館、二〇〇二年）

『近世冷泉派歌壇の研究』（翰林書房、二〇〇三年）『新日本古典文学大系明治編4 和歌俳句歌謡音曲集』（共著）（岩波書店、二〇〇三年）『歌

論歌学集成 第十六巻』（共著）三弥井書店、二〇〇四年）『和歌文学大系』74 布留散東 はちすの露 草徑集 志濃夫廼舎歌集』（共著）

（明治書院、二〇〇七年）など

【論考】

近世俳諧史と大社俳壇

—手銭記念館所蔵資料から見えてくるもの—

伊藤善隆

(立正大学文学部准教授)

はじめに

近世俳諧史を総体として捉えたい。そう考えても、じつは現在の研究では、解明の進んでいる人物、事象と、そうでないものが“偏在”している。つまり、江戸時代の初期から明治期に至るまで、研究が万遍なく存在するわけではない。ごく大雑把に指摘しておけば、俳諧を“文学”として大成させたときされる芭蕉に関する研究は、すでに江戸時代に始まっており、近代になってからは、まさに芭蕉こそが俳諧研究の中心と位置づけられてきた。逆に、芭蕉から遠く隔たった幕末・明治期の俳人たちが作品に関する研究は大変手薄である。

俳諧史のみならず、日本の文学史における芭蕉の重要性については、もちろん誰しもが否定することはできないだろう。しかし、江戸時代の“俳諧”という営為を、全体として理解するためには、芭蕉以外の事象にも目を向ける必要がある。

しかし、芭蕉以外に目を向けようとしたとき、意外に多くの困難に直面することになる。まず、現代を生きる私たちが、近世の一般大衆がこぞつて楽しんだ俳諧という文芸の価値をどのように評価すれば良いのか、という問題がある。芭蕉はともかく、その他大勢の素人俳人たちの作品の内容や質を、近代的な“文学”という価値観を軸にして評価しようとする、どうしても否定的な見解にならざるを得ない。否定的な見解ばかり

りでは、たとえば、江戸時代の人々はなぜ情熱を持って俳諧活動を三百年も続けていたのか、といった問題には答えることができない。

この評価軸に関する問題は、論じる研究者の側に工夫が必要だが、その工夫のためにも、これまで注目されてこなかった人物や事象について検討を加える必要がある。

ところが、いざ検討を加えるため、江戸時代の俳諧資料をつぶさに調査しようとしても、じつはそこに大きな壁が立ち塞がることになる。俳諧資料の特徴としてまず指摘されるべきは、その多様性である。他の文芸ジャンルに関する資料と比較した場合、種類、形態、量、さらには地域的な拡がり等々、多様かつ大量の資料が存在する。それらを実際に閲覧し検討することは、じつは容易ではないのである。

大量の資料が存在すること自体は悪いことではない。しかし、その膨大な資料群は、果たしてこれまでの俳諧研究に十分に利用されてきたのだろうか。たしかに、公共機関や専門図書館、大学図書館などには多くの俳諧資料が所蔵され、十分に利用されてきたように見える。しかし、じつはこれまでの研究で利用されてきた資料群は、俳諧資料全体から見れば、大変偏ったものであったとも指摘できるのである。

本稿では、俳諧資料全体を見渡した場合に指摘できる資料収集と研究の“偏在”を明らかにしつつ、手銭記念館に残された俳諧資料と、それを研究する意義を指摘したい。なお、以下の記述には、論旨の都合上、既発表の論文や報告等と重なる記述がある。注記を加えたので、合わせてご参照頂ければ幸いである。

一、俳諧資料の多様性と“偏在”

ひとくちに“俳諧資料”と言っても、具体的にはどのようなものがあるのだろうか。『俳文学大辞典』（角川書店、平成七年十月）の「俳諧資料」の記述を参考に、便宜的に四つに分類すれば、概ね以下のようなことになる（注1）。

- A. 俳書(版本・写本・稿本)
 - 発句集
 - 俳文集
 - 作法書
 - 書目
- B. 点取俳諧資料・月次俳諧資料
 - 点巻
 - 点印譜
 - 筆跡資料
 - 短冊
 - その他
- C. 俳諧一枚摺
 - 俳額
 - 芭蕉像(絵画・彫刻・陶器・鋳物)
- D. その他
 - 連句集
 - 句稿
 - 伝書
 - 人名録
 - 句合
 - 紀行
 - 注釈書
 - 家集
 - 季寄
 - 詠草
 - 類題句集
 - 俳論書
 - 日記
 - 評点記録帳
 - 高点句集
 - 点印
 - 募句チラシ
 - 返草
 - 丁摺
 - 懐紙
 - 色紙
 - 画賛
 - 書簡
 - 文台
 - 碑文(拓本)

右に挙げた諸資料が俳諧という文芸の研究には必要な資料であるのだが、これらは過不足なく図書館に収蔵されているわけではない。文芸の資料でありながら、困ったことには、図書館には収蔵されない性質を持ったものが、かなりあるのである。

まず、一般的な公共機関の場合を考えてみよう。Aは書物であるから、図書館が収蔵するのも当然と言えよう。しかし、Bの点印、Dの文台、俳額、芭蕉像(彫刻・陶器・鋳物)などはどうだろうか。これらは非冊子体の資料であるため、図書館に収蔵されることはほとんどない。だからといって、こうしたものは、いわゆる「美術品」ではないから、美術館が積極的に蒐集することもない。また、Dの募句チラシ、短冊、懐紙、色紙、俳諧一枚摺、番付など、一枚物の資料も、図書館が積極的に収集する性質のものではない。つまり、非冊子の俳諧資料は、図書館でも美術館でも収集対象としては見做されない可能性が高い。また、こうした資料を博

物館や郷土資料館が収集することがあるが、それはその地域で江戸時代の俳人たちの活動が地域の文化遺産として認識されている特殊な場合に限られる。このような、資料の多様性による「偏在」という問題は、俳諧資料に特有である。これが、俳諧調査の「壁」となるのである。

つぎに、大学図書館や俳諧資料に特化した文庫の場合を考えてみよう。たとえば天理図書館綿屋文庫(俳書一七、〇〇〇点余を収蔵)、東京大学附属図書館(洒竹文庫に四六七一点、竹冷文庫に一四五二点、知十文庫に四五四点の俳書を収蔵)、公益財団法人柿衛文庫(俳書三五〇〇点と真跡類三〇〇〇点余を収蔵)などが思い浮かぶ。

現在、これらの図書館や文庫に所蔵される資料なくしては、俳諧研究を行うことは全く不可能である。ただし、これらの図書館や文庫の収集は、近代になって俳諧研究のために行われたものである。したがって、江戸時代当時の俳諧活動の文脈からは切り離されている側面があることは、どうしても否めないのである。このことが、従来の俳諧研究の価値観を相対化することを目的として俳諧資料を全体を見直したいと思ったときには、大きなジレンマとなる。すなわち、相対化できる可能性を秘めた資料が、そもそもの収集の段階で排除されている可能性が高いとも考えられるからである。

このように、現在、私たちが利用できる俳諧資料の大部分は、江戸時代当時において自然発生的に形成されたものではない。そのため、一般的な図書館や公共機関に収蔵された俳書ばかりを研究対象としていても、実際の「俳諧」という文芸享受のあり方を理解すること、すなわち近世俳諧史の全貌を捉えることは、難しい。したがって、手銭記念館に所蔵される資料は、江戸時代を生きた人々が実際に俳諧活動を営んだ結果として残された資料であるという点が大変貴重なのである。

二. 俳諧史の区分と資料の「偏在」

さて、つぎに問題とするのは、俳諧史における年代の区分と資料の

“偏在”である^(注2)。現在の研究では、俳諧史を概ね以下のように分けて考えている。

- ① 室町俳諧（宗鑑と守武）
- ② 貞門俳諧（貞徳とその門人）
- ③ 談林俳諧（宗因と西鶴）
- ④ 蕉風俳諧（芭蕉とその門人、現在は蕉門に限定せず「元禄俳諧」とも。）
- ⑤ 享保期～宝暦期（都市俳諧と地方俳諧、以前は「暗黒時代」とも。）
- ⑥ 明和期～天明期（蕪村時代、「中興期」とも。）
- ⑦ 化政期（一茶時代）
- ⑧ 天保期～幕末期（月次俳諧）
- ⑨ 明治期以後（旧派と新派）

このうち、これまでの俳諧研究の中心は④であった。もちろん、これからもそうあり続けるであろう。そのこと自体にとくに異義を唱えるつもりはない。しかし、芭蕉に重きを置き過ぎると、見落とされる資料が出てきてしまう。それが問題である。前節で分類した資料の種類ごとに指摘すれば、以下のようになる。

まず、Aの伝書だが、現在残っているものは、圧倒的に⑤以降のものが多し。しかし、従来の伝書研究は俳論研究のためのものであり、芭蕉の俳論をどれだけ正確に伝えたものであるか、という興味関心が、それぞれの伝書の価値を判断する根底にあった。そのため、芭蕉に近い俳人たちの伝書は尊重されるが、大量に残っている⑤以降の伝書類はさほど重要視されてこなかったのである。

つぎに、Bの点取俳諧資料（点帖・高点句集・点印譜・点印）だが、大名の点取俳諧が盛んになるのは、やはり芭蕉没後、とくに⑤以降である。また、芭蕉は点業を廃していた上、点取俳諧に批判的であったと伝えられる^(注3)。そのため、研究者の興味関心は必然的に希薄とならざるを得なかったのである。

また、Bの月次俳諧資料は、⑦以降、主には⑧⑨の時期のものである。

芭蕉没後から遠く隔たった時代であることはもちろん、⑥の蕉風復興とも異なる方向性で“大衆化”が進んだ時代であると考えられている。とくに明治期に正岡子規が月並調と批判したこともあって、現在では誰も積極的に評価しなくなってしまう資料体である。

さらに、Cの書簡だが、とくに俳人の書簡が多く残っているのは、⑦以降である。これは、遠隔地の俳人同士であっても、書簡で互いに交流することが流行ったため、何か具体的な用件を伝える手段としてというよりも、書簡の遣り取りそのものが目的化されるようになった結果だと考えられる^(注4)。もちろん、芭蕉を研究の中心に据える限り、この時期の書簡を積極的に扱う必要性は限りなく低いのである。

そして、Dの俳諧一枚摺だが、これは芭蕉の時代にはまだ存在しなかったものである。現存する最も古い俳諧一枚摺が「元禄十五年歳旦摺物十二種帖」（柿衛文庫蔵）であるのに対し、芭蕉が没したのは元禄七年である。つまり、芭蕉を研究の中心に据えるかぎり、俳諧一枚摺を扱う必要はないのである。これが、俳諧一枚摺の研究が等閑視されてきた理由の一つである。

他にも、Dの番付は⑦以降に多数制作されたものである。俳人番付に限らず、所謂「変わり番付」は寛政期以降に多く制作されているが、これは宝暦七年に縦一枚形式の現在の形の原型となる相撲番付が発行されたことが端緒となったものである。したがって、これも当然、芭蕉とは直接関わらない資料である。

Dの俳額は⑦や⑧、あるいは⑨以降のものが多く残っている。これは、先述した月次句合の流行に伴い、神社などに奉燈・奉額する催しが盛んに行われたためである。これも、直接的に芭蕉研究と関わることはない。

Dの碑文（拓本）は、⑤以降のものが多い。すなわち、寛保三年の芭蕉五十回忌以降、芭蕉顕彰が盛んになり、芭蕉塚（翁塚）の建立と追善集の出版が流行したためである。宝暦十一年以後に刊行された『諸国翁墳記』によれば、はじめ百基程度だった芭蕉塚は、幕末期には四百基を越える

ほどであったと指摘されている。これは、たしかに芭蕉に関わりのある資料体だが、あくまで後世の俳人たちの芭蕉受容の問題であって、芭蕉その人の“文学”には直接関わらない資料である。

Dの芭蕉像も、芭蕉の顕彰、芭蕉の神格化にともなう多数制作された。すなわち、⑥⑦以降に制作された芭蕉を描いた軸物が多く残る。また、木彫や焼き物の芭蕉像も意外に多数のものが残っている。これも、碑文と同様、芭蕉に関わる資料だが、芭蕉その人の“文学”には直接関わらない資料である。

以上のように検討してみると、俳諧資料が多様性を備えたものであること、またこれまでの芭蕉中心の研究では利用されてこなかった資料が多いことがご理解頂けよう。

三、所蔵機関による俳諧資料の“偏在”

これまで指摘してきたとおり、図書館に収蔵された俳書ばかりを研究対象としても、実際の“俳諧”という文芸享受のあり方を理解することは難しい。したがって、手銭記念館に所蔵されているような、江戸時代の人々が実際に俳諧活動を営んだ結果として残された資料は、大変貴重である。

というのは、前節で指摘したような、これまでの研究では顧みられなかった資料群は、その一点ずつを個別に見ただけでは、俄にその意義や価値が判らないことが多い。しかし、ある程度まとまった量が残っていれば、個々の資料の相互の関連性を解明することができ、資料一点一点の意義や価値も明らかにできる。その積み重ねが、当時の俳人たちの活動の変遷を具体的に跡づけることに繋がるのである。

たとえば、大名の俳諧資料がまとまって所蔵されるいくつかの機関がある。その一つ、真田宝物館は、主に⑥⑦の時代の俳諧資料を所蔵しているが、これは、松代第六代藩主真田幸弘（俳号菊貫、元文五年～文化十二年）に関わるものである。これを調査することで、幸弘が江戸座の

大名点取俳諧に遊んでいたことが判る^(注5)。同様に、大名点取俳諧の資料を所蔵している機関としては、細川重賢（俳号花裡雨）の資料を所蔵する永青文庫^(注6)や、酒井忠徳（俳号凡兆）の資料を所蔵する致道博物館などが知られている。そうであれば、これらの機関に所蔵される資料を合わせて検討することで、江戸座の大名点取俳諧の実態がある程度見えてくることになる。実際に、従来は限定的にしか判らなかつた点取俳諧に関する様々なことが、この三十年程の間に、こうしたいくつかの所蔵機関の資料調査によって明らかになってきた。

いっぽうで、八戸市立図書館と八戸市博物館にも、やはり大名の俳諧資料が所蔵されている^(注7)。主に⑦⑧の時代の俳諧資料である。これは、八戸七代藩主南部信房（俳号畔李、明和二年～天保六年）のものである。ところが、この畔李の資料には、大名点取俳諧の資料は含まれておらず、専ら月次句合の資料が残されている。つまり、“大名”という括りでは菊貫も畔李も同じだが、菊貫は大名点取俳諧、畔李は月次句合に遊んでいたという違いがみられるのである。

大名に限らず、月次句合が流行するのは化政期以降である。つまり、没年で比較すると、菊貫の畔李の年の差は二十年である。この間に、俳諧の流行が点取俳諧から月次句合へと変わったこと、その変化の波は大名たちをも巻き込んでいたこと、などが具体的に判るのである^(注8)。

つぎに、豪農や豪商の俳諧資料をみてみよう。たとえば、富加町郷土資料館は、美濃国加治田の豪農平井家九代当主冬秀（俳号見爾、享保十二年～天明三年）、十代公寿（俳号土琴、宝暦十年～文政四年）の俳諧資料を所蔵している。また、平井家の俳諧資料は早稲田大学図書館と柿衛文庫に歳旦帖や一枚摺が分蔵されていることが判っている。これらは全て美濃派の俳諧資料であるので、見爾と土琴は、美濃派に遊んでいたことが判る。見爾と土琴は美濃の俳人であるから、これは当然といえば当然といえよう。

いっぽうで、手銭記念館の資料はどうか。手銭記念館には、主に手銭

家三代当主の白三郎（俳号白澤園季硯、正徳二年～寛政三年）、その弟の兵吉郎長康（俳号徳園人冠季、享保四年～寛政八年）、五代の官三郎（俳号衝冠斎有秀、明和八年～文政三年）に関わる俳諧資料が残っている。季硯・冠季の時代の資料としては、淡々系の行脚俳人である節山が残した資料、それに百羅が京都からもたらした去来系の俳諧資料が存在する。季硯や冠季は、ある時期には美濃派に接近していたこともあったらしく、美濃派系の資料が無いわけではない。しかし、富加町郷土資料館の資料が美濃派のものばかりであったのに比べて明確な違いがある（注9）。

従来の研究では、芭蕉没後、すなわち④以後の俳諧は、地方俳諧と都市俳諧に分かれて展開していくとされてきた。もちろん、それはそれとして大筋では正しいのだが、そのいっぽうで子細に検討すれば、中国、四国、あるいは九州には、淡々系や野坡系の俳人たちが相当数いたことも、従来の研究ですでに明らかにされてきた。当然、地域によって細かな違いはある。その地域ごとの違い、すなわち特徴を明らかにするためには、その地域にある程度まとまって残っている俳諧資料の検討が必要なのである。

たとえば、桑原視草氏は『出雲俳句史』に、④の風水以降、⑥の百羅たちまでの出雲俳諧の歴史は「中絶」していたと記していた。しかし、手銭記念館の資料によって、節山が元文四年に大社地域に滞在し、冠季たちがその門人となっていたことが明らかにされた。興味深いことに、節山は、讃岐丸亀の出身で一時京都に住んだが、享保末年から宝暦末年頃までには九州に移り、豊後鶴河内に草案を結んで、日田の野坡系の俳人たちを淡々系に帰依させていたことが、大内初夫氏の『近世九州俳壇史の研究』（九州大学出版会、昭和五十八年十二月）で、すでに明らかにされていたのである。おそらく、節山の来雲は九州への旅の途中だったのだろう。このように、点と点が繋がることで、当時の俳人の営みが次第に明らかになってくるのである。

さらに、百羅が京都岡崎の空阿の許を訪ねた折の記録である『岡崎日記』

も、すでに大磯義雄氏によって『岡崎日記と研究』（未刊国文資料刊行会、昭和五十年十月）として翻刻紹介されていたのだが、この内容と、手銭記念館に残されていた百羅自身の著述の内容、さらには節山が残した伝書の内容とを比較することで、淡々系の節山と、美濃派の雲裡坊（百羅は一時的に近江で雲裡坊に師事していた）、そして去来系の空阿とその教えをうけた百羅、この四者の俳諧に対する姿勢や考え方について、具体的に比較することができるのである。その結果、別稿（注10）で指摘したとおり、季硯や冠季たちが、はじめは節山の門人となり、つぎに美濃派に接近し、最終的には百羅を支持した、その理由も見えてくるのである。

このように、それぞれの地域の特徴を明らかにし、他地域の特徴と比べる作業を積み重ねることで、ようやく臆気ながらも俳諧史の全体像が見えてくるはずなのである。そのためには、酒竹文庫や綿屋文庫、柿衛文庫のような専門的な文庫を利用することは必須であるし、大磯氏が『岡崎日記』を見出されたように、個人の努力で資料を収集することも必要である（注11）。その上で、俳諧資料の“つながり”を検討するために、手銭記念館に所蔵される資料はとくに重要なのである。俳諧史の全体を大きな一枚のジグソーパズルに例えるならば、一点一点の俳諧資料は、いわば一つ一つのピースでしかない。それを繋ぎ合わせて全体像を可視化できるようにするためには、“当時の俳人たちが俳諧を楽しんだそのままを残す資料体”は大変重要なのである。

四、最近になって見出された書簡群

以上、俳諧資料の多様性について説明してきた。その上で、手銭記念館の資料の重要性を具体的に説明するために、最近になって収蔵品の中から新たに見出された書簡群について触れておきたい。

これまでの調査では、手銭記念館には、五代目の有秀が所蔵していた『万家人名録』（七五三長齋編、文化十年刊）が残されていることが明らかにされていた。『万家人名録』は、当時の俳人たち六百余名の発句と肖像画、

それに居所（住所）を掲載し、大本五巻五冊の堂々とした体裁で刊行された撰集である。

手銭記念館の『万家人名録』で注目されるのは、書袋（本の包み紙）が失われず、冊子とともに伝存していることである。そして、その書袋には、「有秀様」と墨書した紙片が貼られてお

り【図版1】、本文には有秀の句と肖像画、そして居所が掲載されている【図版2】。つまり、現在、手銭記念館に残されている『万家人名録』は、有秀自身が入集を希望し、入花料（掲載料）を添えて入集を申し込み、出版された際に編者から贈られた本であると推測されるのである。

先に述べたとおり、俳人同士の書簡の遣り取りは、ある時期から遣り取りそのものが目的化されるようになった（注12）。すなわち、遠隔地の俳人同士であっても、書簡で互いに交流することが流行ったため、用件を伝える手段としてというよりも、遣り取りそのものが目的となったのである。その書簡の遣り取りの性質の変化を巧みに捉えて、肖像画入りの俳人住所録として出版したものが『万家人名録』であったと考えられる。とすれば、『万家人名録』に入集を希望した有秀も、遠隔地の俳人たちと交流を持つことに強く関心を抱いていたはずだということになる。実際、これまでの調査で、「諸国俳人名寄」という資料が見つかっており（注13）、有秀が何人かの他地域の



【図版1】『万家人名録』書袋（左肩の紙片に「有秀様」と墨書する）



【図版2】有秀肖像『萬家人名録』第四巻

俳人たちと交流を持っていたことは明らかであった。

ところが、筆者は、平成二十三年以来、手銭記念館に所蔵される俳諧資料の調査に従事してきたが、これまでは、有秀に宛てた諸国の俳人たちの手紙を、手銭記念館所蔵資料中に見出すことはなかった。そのため、具体的な交流のあり方は判らなかつたのである。しかし、ごく最近になって、有秀の所蔵品だつたと思われる俳諧一枚摺や詠草を入れた包【図版3】と有秀に宛てた書簡が所蔵資料の中に見出された旨、同館学芸員の佐々木杏里氏よりご教示を得ることができた。これにより、『万家人名録』刊行前後の有秀の活動の一端、ひいては『万家人名録』刊行前後の諸国の俳人たちの活動の様相の一端を、具体的に明らかにすることができるようになった。

まず、今回新たに見出された書簡だが、以下の九点である。有秀の交遊録「諸国俳人名寄」を参照すると、二名を除き、そ



【図版3】一枚摺等が入っていた袋

こに記載のある俳人の書簡である。※印を付して引用したのは、その「諸国俳人名寄」の記述である。なお、引用中の「未」は文化八年、「申」は文化九年、「亥」は文化十二年、「子」は文化十三年である。

・琴州書簡（八月十三日付有秀宛）

※サツマ鹿子嶋 琴州 素良、周右衛門 町人 未冬文通 返書到来

・天外書簡（麦秋廿六日付白澤園宛）

※同州（長崎） 天外 藤田氏 当時テイハツ 町人也 未冬文通 返事到来

・蒼虬書簡（五月十三日付有秀宛）

（難読）

※京 はせを堂 蒼虬 申夏日之□便 文通 返書到来

・止観書簡（九月中旬付白澤園安利秀宛）

※若州小浜御家人 止観 熊川町出役人 宮川善右衛門 御同心

申六月文通 返書到来

・樗堂書簡（晩秋廿三日付白澤園宛）

※イヨ 二疊庵樗堂 角や栗田与三左衛門 申夏文通

・羅風書簡（六月二日付浦やす宛）

※下関 羅風 油屋仁右衛門 亥の年書翰到来

・芝山書簡（正月廿八日付薄月庵有秀宛）

※江戸 神明前 芝山 子二月書翰到来

・久利元淑書簡（弥生三日付浦安宛）

※「諸国誹人名寄」に記載ナシ。

・帰来書簡（七月九日付白澤宛）

※「諸国誹人名寄」に記載ナシ。

以上を参照すると、新たに見出された書簡は、『万家人名録』刊行の文化十年以前に交流がすでに始まっていた人物のものが五通、刊行後に交流が生じた人物のものが二通、交流が始まった時期が不明なものが二通となる。

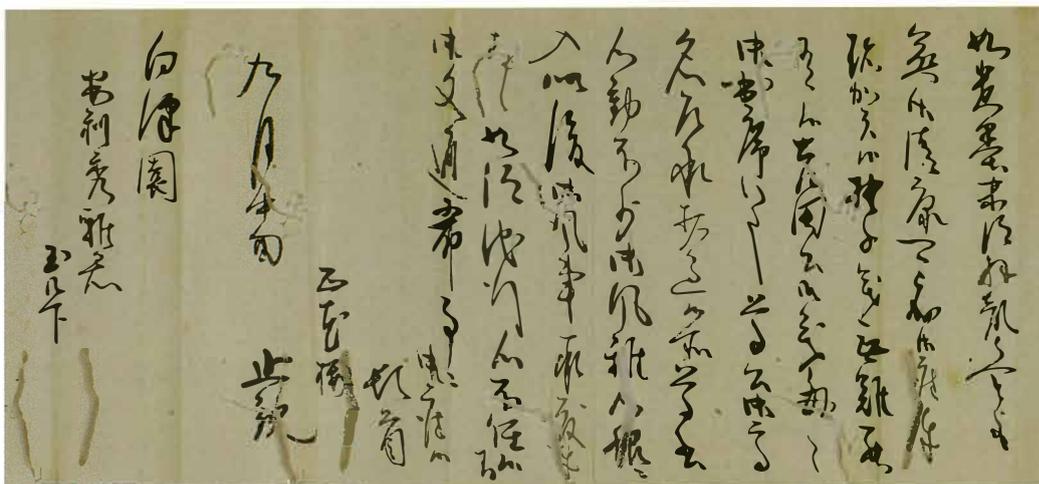
このことから、『万家人名録』の刊行は、他国の俳人たちと交流を持ちたいという欲求が全国の俳人たちの間で共有されていたことを、巧みに捉えた企画であったことがあらためて裏付けられる。詳細は別稿^{（注14）}に譲るが、止観の書簡【図版4】には「尊公御高名乍承打過候所（中略）以後御風事承度奉存候。如仰他行心不任候間、御文通希事御座候」という文言が見える。すなわち、「あなた様（有秀）のご高名は承知していましたが、とくにご連絡などはしないでおりました。これからはあなた様の御風事（風流な俳諧活動）をお聞きしたい。あなた様が仰るように、

思いのままに他行（外出や旅行）ができるわけではないので、御文通をお願いしたいことです」といった意味の文言が見える。つまり、これまで面識のなかった止観に対して、文通で交際しようとして、有秀から申し出たことが推測される手紙である。

また、琴州【図版5】の書簡も同様である。すなわち、「扱、折々御文通可致旨被仰下、御叮嚀之段、千万忝奉存候」という文言が見える。これは、「さて、折々は文通をしましょうと仰つて頂き、ご丁寧なことと大変忝く存じ申し上げます」といった意味である。これも、止観の手紙ほど明確に言っていないが、やはり有秀から琴州に申し入れた文通に対する返信であろうと推測することができよう。

つまり、この二通からは、有秀が積極的に他地域の俳人たちと交流したいと希望しており、自分から手紙で文通を申し入れていたことがわかる。

なお、羅風書簡の宛名の「浦やす」、久利元淑書簡の宛名の「浦安」は、有秀とともに大社俳壇の指導者的立場にあった日々庵浦安（広瀬氏、出雲大

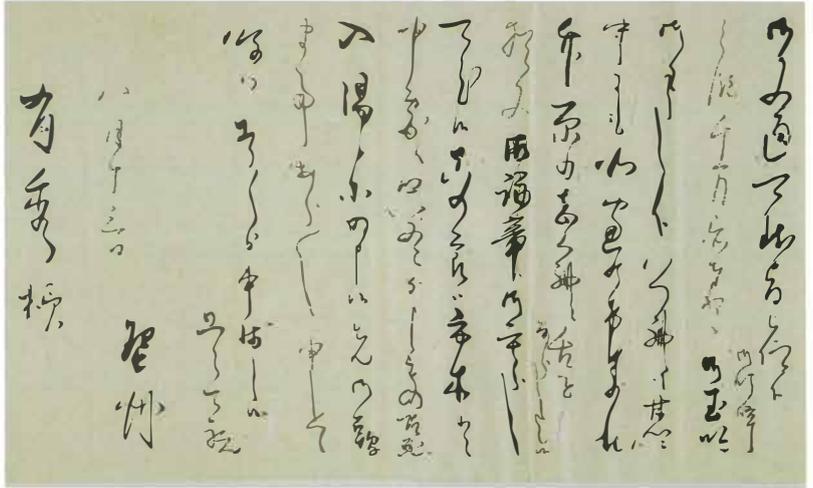


【図版4】止観書簡（部分）

社（社家）である。手銭家と広瀬家とは姻戚関係にもあつたので、おそらく二人は、いわば大社俳壇の代表として、他地域の俳人との交友関係を共有していたのだろう。有秀だけでなく、浦安も『万家人名録』に入集していることも、そのことの裏付けとなろう。

今回存在が確認された九通のうち、琴州も『万家人名録』巻二の十丁裏に入集する。同様に、蒼虬は巻四の七十五丁裏、樗堂は巻二の六十三丁表、羅風は巻五の十七丁裏、帰来は巻四の十二丁裏に、それぞれ入集する。また、芝山は、『万家人名録』には入集しないが、『万家人名録拾遺』（文政四年刊）に入集し、芝山の書簡を有秀の許に届けた太笈は『万家人名録』巻三の四十三丁に入集する。このように、他地域の俳人たちと広く文通で交流したい、という欲求は、有秀に限らず、広く全国の俳人たちに共有されていたと推測することができるのである。

以上のように検討すれば、『万家人名録』刊行の背景を具体的に理解することができよう。残念ながら、有秀は『万家人名録』刊行から七年経った文政三年に亡くなってしまいが、もう少し存命であったならば、もっと多くの交流が生じていたのではないかと想像される。



【図版5】琴州書簡(部分)

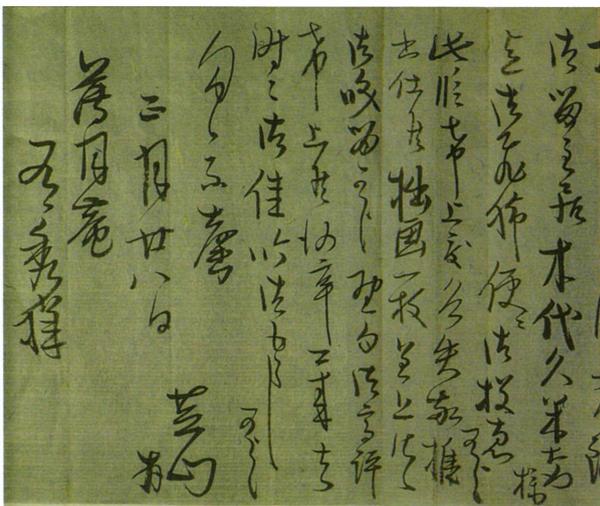
五、新たに見出された書簡から見えてくるもの

さて、こうした俳壇の傾向を検討する上で注目したいことは、『万家人名録』には、蒼虬のような宗匠（プロの俳人＝業俳）と、有秀のような素人の俳人（アマチュアの俳人＝遊俳）とが、一緒に入集していることである。

『万家人名録』以前の俳人の居所を記載した人名録といえば、古くは『俳諧行事板』（延宝八年刊）、『誹諧京羽二重』（元禄四年刊）、少し時代が下ると江戸座の宗匠の居所を記した『宗匠点式并宿所』（寛延二年序刊）、大坂の雑俳点者の居所を記した『誹諧耳勝手』（宝暦七刊）などが思い出されるが、これらに収録された俳人は三都の有名宗匠（点者）たちである。つまり、これらの人名録は、主に素人の俳人たちが宗匠に批点を依頼する際に利用する目的で刊行されたものである。

『万家人名録』には、宗匠も遊俳も同様に入集する。その結果として、遊俳が宗匠に批点を依頼するだけでなく、宗匠から遊俳たちに連絡や働きかけを行う環境が整ったとも考えられる。

その裏付けになるのが、芝山の書簡【図版6】である。詳細は別稿（注15）に譲るが、芝山の書簡は、「近年浪華之奇測井眉等」の「句集」、すなわち、大坂の奇淵編『花市会』



【図版6】芝山書簡(部分)

『松風会』と、井眉編『華鳥文庫』のような撰集に倣い、江戸で句集を出版しようとしているので、是非出吟（投句）して欲しい、と依頼するものであった。奇淵や井眉の撰集は、全国から句を募って毎年刊行していたものである。これに倣った芝山の企画は、『四海句双紙』（初編は文化十三年刊、二編は文化十四年刊、三編は文化十五年刊、四編は文政二年刊、五編は文政三年刊）として結実する。有秀の入集は確認できないが、有秀、浦安と親交のあった花叔（出雲国神門郡古志住）が入集している。興味深いことに、花叔も『万家人名録』に入集しているのである。確証はないが、おそらく芝山は『万家人名録』を見ており、花叔の許にも出句を依頼する手紙が届けられたのであろう。

このように、『万家人名録』の刊行は、遊俳同士ばかりでなく、宗匠と遊俳との交流も活発化してゆく時代的な背景を反映したものである。こうした俳人同士の交流の活発化が、化政期を始発として天保期から幕末、明治期に爆発的に流行する月次句合の流行に結びついていったのである。つまり、各地の俳人たちから発句と入花料を集め、句集の刊行後にはそれを俳人へ配布するネットワークを全国的に構築しなければ、芝山が企画した撰集は刊行できなかったはずだ。

実際、芝山の書簡では、投句先を「当地御上屋鋪御留主居木代久米右衛門様」として、「御飛脚便」で届けて欲しいと書いている。つまり、発句の取次を松江藩の江戸屋敷にいる留守居役に頼んでいたという事実が判明する。こうした遣り取りを積み重ねることで、化政期以降に盛んになっていく月次句合の募句や投句、入花料や丁摺、景品などの遣り取りのネットワークが構築されていくのではないかと推測するのである。

六、その後の見通し―月次句合の流行期に関して―

では、月次句合が流行した天保期から明治期にかけて、出雲の俳諧はどのような状況だったのであろうか。この時期の資料に関しては、まだ

十分に調査が及んでいないが、現在判っている限りで報告しておきたい。

まず、手銭記念館には、「大社箱甫納四季発句合」（募句チラシ）が残っている。天保四年の六月が投句の締め切りで、米子や松江、平田や今市といった広範囲の俳人たちが関わった句合である。「入花 一句八銅」とあるので、一句あたりの投句代金は八文、現代で言えば、百円か二百円程度であったことが判る。景品は、巻頭（一等賞）が「扇子」と「龍門上下一具」（絹の袴）、巻軸（二等賞）が「縞縮緬」、以下、十等までは「郡内」（郡内織）、二十等までは「緋毛氈」、三十等までは「ハカタ帯」、四十等までは「木綿沓疋」、百等までは「木綿沓反」、二百等までは「宗匠扇面沓」（宗匠が揮毫した扇面一枚）となっている。

興味深いのは、このチラシには「八雲庵代選 皇都 霍巢夙也評」とあって、本来は松江の八雲庵龍尾が撰者であるにも関わらず、何故か「代撰」として京都の夙也に実際の撰句を依頼すると公言していることである。これは、月次句合に遊ぼうとする出雲の俳人たちにとって、地元八雲庵龍尾の撰句よりも、京都の霍巢夙也の撰句の方が、おそらく魅力があったということを示していると考えられる。

三都の宗匠と直接関係を結びにくかった地方の作者たちが多く雑俳に遊んでいたことは、元禄期の前句付や笠付などについて指摘されていることだが、化政期以降の月次句合においても、その点に関しては同様だったようだ。つまり、月次句合は、三都（江戸・京・大坂）の宗匠と地方の俳人たちとを繋ぐ機能を果たしていたと考えられる。

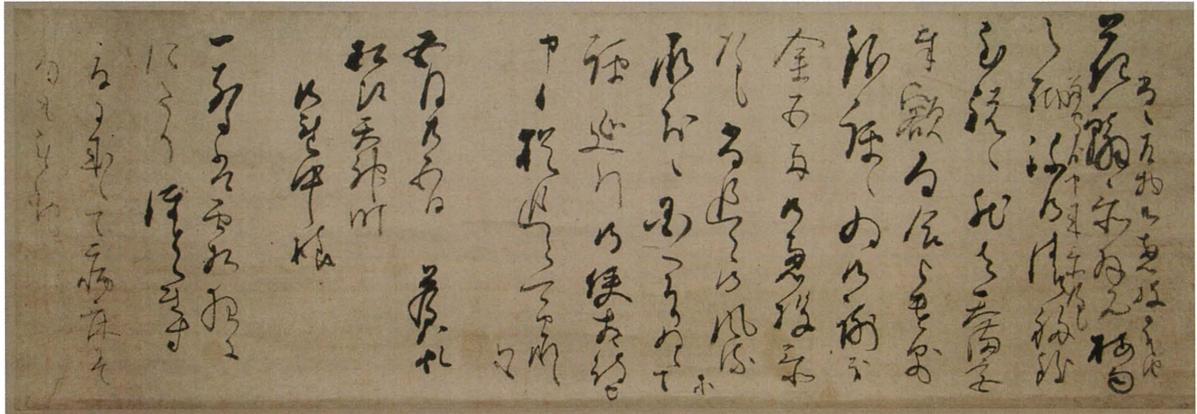
そう考えると、化政期以前とそれ以後とを比べると、出雲における俳人たちの活動も、地元の地縁や血縁によるものがあまり目立たなくなるように思われる。たとえば、大社地域でも、享保期から化政期にかけては、手銭家の季硯、冠李、有秀、広瀬家の百羅、浦安、茂竹らの活動が、相互に密接な関連を持って顕著であった。しかし、有秀が文政三年に没してから、落柿舎五世を称した茂竹が慶応三年に没する頃になると、地縁や血縁を核とした俳諧活動は、その印象が次第に薄れていく。たとえば

桑原視草氏はつぎのように記している。

幕末時代には松江に山内曲川、裏辻耕文があり、杵築に広瀬浦安の子蘭々舎茂竹、春日信風、田中安海、古川凡和、加藤梅年等があり能義郡に母里藩主松平四山及び比田村に若槻楚青がある右の内杵築の俳人はいづれも百羅の流れを汲んだが総じて當時の俳句は後年正岡子規が月並と称して軽蔑したものであるべきものが甚だ乏しい。而して此時代を代表する者は曲川である。

『出雲俳句史』「第一編 明治以前 第一章 概説」

地縁や血縁によって活動していた化政期以前の俳人たちとは対照的なものが、ここで言及されている山内曲川（文化十四年〜明治三十六年）である。幕末から明治期に活躍した曲川は、もともと松江の天神町で骨董商をしていたが、俳人を志した際に、出雲の俳人ではなく、京都の荒木万籟に入門した。なぜ、松江の俳人が京都の宗匠の門人になったのだろうか。じつは、その理由も月次句



【図版7】蒼虬書簡(松江天神町御連中様宛)

合にあつたと考えられるのである。その証拠となるのが、次の書簡【図版7、個人蔵】である。

花翰忝拜見、梅句之砌御清福致至祝候。然者天満宮奉額句合被遣、則致評候為御謝義、金五両御恵投忝存候。尚追々御風流等承度候。国へ下り居候て評延引、御使相待せ申候。猶追々可申承候。以上

五月廿五日 蒼虬

松江天神町

御連中様

一声は霜夜にたりほとゝきす

夏に成候て、病床にて句も無御座候。

尚々、反物御恵投被下候由、留守より申来忝存候。

これは、京都の月次句合の宗匠である蒼虬から「松江天神町御連中」に宛てた手紙である。内容は、「天満宮奉額句合」の「評」（評点＝撰句）の点料として五両を受け取ったことに対する礼状である。五両といえ、結構な金額である。現在の貨幣価値に正確に換算することはできないが、試みに貨幣博物館のホームページを参照すると（令和元年十二月十五日参照）、一両は、米価で換算すると六万三千円、大工の賃金で換算すると三十四万五千円であるという。いま、便宜的に二つの平均価を取れば五両は約百万円、点料を人件費と捉えて大工の賃金と同程度とすれば、百七十五万円程度にもなる。また、謝金の他に、反物まで贈られていたことも、尚々書きから判る。松江天神町の連中は、蒼虬を手厚く遇していたようだ。

蒼虬は有秀とも書簡の交流のあつた宗匠だが、天神町の連中は、おそらくは蒼虬にしばしば句合の評を頼んでいたのだろう。曲川が入門した万籟は、もともとは丹後宮津の人だが、京都へ出て蒼虬の弟子となり、蒼虬の信頼が厚かつた俳人である。蒼虬にとつて天神町の旦那衆たちが

上得意だったとすれば、万籟がそれを引き継いでいても不思議ではない。推測を重ねることになるが、そうであれば、天神町の骨董商だった曲川が、俳人を志した際に万籟を頼るのも、当然の成り行きだったと言えよう。すなわち、蒼虬・万籟・曲川という繋がりには、月次句合流行があったからこそなのである。こうした化政期以後の俳人たちのつながりは、地縁や血縁によるそれまでの俳人たちの結びつきとは、かなり事情が異なってきたと言えよう。

七、おわりに

以上に示したように、手銭家伝来の資料は、従来の研究の欠落部分を埋めるのみならず、新たな問題の提起や、視点を獲得する契機となる重要な資料である。この八年ほどの調査を通じて、まずは季硯、冠李、百羅の時代、すなわち享保期から中興期までの大社俳壇の活動の具体的な様相が明らかになってきた。また、有秀宛の書簡が見出されたことにより、浦安、有秀の時代、すなわち化政期の大社の俳諧活動の具体的様相もある程度明らかになってくるだろう。

重要なことは、こうした調査の積み重ねで明らかにされる歴史的事実は、単純に大社という地域に限定されたものではなく、当時における俳人たちの動向や価値観を、全国規模で明らかにすることに結びついていくということである。

化政期以降の俳諧に関する研究は、実はまだまだ不十分である。しかも、本稿の前半で繰り返し強調したように、俳諧資料は多様である上に偏在している。近代になってから形成されたコレクションのみを調査対象にしているのは、俳諧史の全体像を描き出すことは難しい。繰り返しになるが、手銭記念館に残された資料は、大社という地域の俳壇の歴史を明らかにするだけではなく、近世俳諧史という大きなジグソーパズルの重要なピースとなる可能性を秘めた資料なのである。

注

(1) 拙稿「俳諧資料の特性―近世における蔵書形成と文芸享受」という視点から―(『調査研究報告』第35号、国文学研究資料館調査収集事業部、平成二十七年三月)を参照。

(2) より詳しくは、前掲注(1)を参照。

(3) 芭蕉は点取俳諧を嫌い、「点者をすべきより、乞食をせよ」(普安編『石舎利集』享保十年刊)と言ったと伝えられる。また、芭蕉は、元禄五年二月十八日付曲水宛書簡で点取俳諧に言及し、俳諧を楽しむ人の態度を三等級に分けて論評している。この書簡は、蝶夢によつて『芭蕉翁三等之文』(寛政十年刊)として刊行され、よく知られている。

(4) 拙稿「モノから読み解く江戸俳諧の黄金時代 第十回 俳人用の手紙文例集^{必要四時}『俳諧文章車』の正体」(『俳句』平成二十二年九月号、角川学芸出版、平成二十二年九月)、拙稿「モノから読み解く江戸俳諧の黄金時代 第十一回 手紙と俳諧の素敵な関係 翼もなく千里を飛ぶものとは?」(『俳句』平成二十二年十一月号、角川学芸出版、平成二十二年十月)、拙稿「モノから読み解く江戸俳諧の黄金時代 第十二回 俳人の肖像画付き住所録? 『万家人名録』と俳諧の広がり」(『俳句』平成二十二年十二月号、角川学芸出版、平成二十二年十一月)、拙稿「『俳諧手鑑ふぐるま集』に見る近世俳人の手紙文化」(『立正大学文学部論叢』第140号、立正大学文学部、平成二十九年三月)を参照。

(5) 『文人大名 真田幸弘とその時代』(長野市教育委員会文化財課松代文化施設等管理事務所(真田宝物館)平成二十四年九月)を参照。

(6) 『俳諧集』(出水叢書12、汲古書院、平成六年五月)に翻刻と解説が備わる。

- (7) 『八戸俳諧の歩み』(平成元年六月、八戸市博物館)、『八戸俳諧倶楽部創立百周年記念事業特別展 八戸の俳諧』(八戸市博物館、平成十五年三月) 他を参照。

(8) 前掲注(1)を参照。

(9) 前掲注(1)を参照。

(10) 拙稿「大社の俳人にみる師弟関係―『岡崎日記』前後―」(『日本文学』第66巻10号、日本文学協会、平成二十九年十月) 参照。

(11) 大磯氏ご収集の俳諧資料は、現在、「大磯義雄文庫」として岡崎市美術博物館に収蔵され、『大磯義雄文庫目録』(平成三十年刊)も刊行されている。

(12) 前掲注(4)を参照。

(13) 拙稿「翻刻・手錢記念館所蔵俳諧伝書(五)―手錢記念館所蔵俳諧資料(一〇)―」を参照。

(14) 拙稿『『万家人名録』刊行前後―手錢有秀宛俳人書簡―』(『立正大学人文科学研究所年報』第56号(立正大学人文科学研究所、令和二年三月、刊行予定)を参照。

(15) 前掲注(14)を参照。

〈付記〉

本稿をなすにあたり、手錢家の皆様には特段のお世話に与りました。また、手錢記念館の佐々木杏里様には、資料写真のご提供をはじめ、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

本稿は、平成30年度人文科学研究所個人研究「俳人肖像画集の研究」、ならびに山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究」と活用に関するプロジェクト(二〇一九〜二〇二一年度、代表・野本瑠美)、科学研究費補助金(基盤研究(C))「化政期俳諧再評価のための新

研究」(研究課題番号18K00296代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

プロフィール

いとうよしたか (立正大学文学部准教授)

一九六九(昭和四十四)年四月二十九日、東京生まれ。

早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程退学。博士(文学)。

早稲田大学文学部助手、湘北短期大学教授等を経て現職。

専門は近世文学、とくに、芭蕉をはじめとする近世俳諧研究と、近世

前期の漢文学研究。

主著『古典俳文学大系CD-ROM版』(共編、集英社、二〇〇四年)『カラー

版 芭蕉、蕪村、一茶の世界』(共著、美術出版社、二〇〇七年)『芭蕉』(コ

レクション日本歌人選34) (笠間書院、二〇一一年)『元禄時代俳人大

観 第一〜三巻』(共著、八木書店、二〇一一〜二〇二二年)

【報告要旨】

寛政元年の松平雪川の出雲大社参詣に見る文化交流

小林准士

(島根大学法文学部教授)

松江藩松平家六代宗衍の三男である衍親は、江戸で俳諧を嗜んだ人物で雪川と号した。彼の没後に編まれた『為楽庵雪川発句集』『為楽庵俳諧文集』のほか『恵飛良歌仙』など、いくつか俳諧関係の書物を世に遺している。また天明七年(一七八七)以降、兄の藩主治郷(号は不昧)に随行するなどのかたちで出雲国を訪れ、天明七年、天明九(寛政元)年、寛政四年(一七九二)、寛政七年には杵築大社にも参詣した。

これらの参詣に際しては杵築町の手銭家に立ち寄ることがあり、同家には彼を応接した際の記録がのこっている。これによると、当時の同家当主敬慶は雪川から発句を求められたが、恐縮してか遠慮している。しかしこのような藩主あるいはその一族と領内の豪農・豪商が俳諧を通じて交流することはその後も続いており、例えば文政三年(一八二〇)春に成立した『春帖集』(手銭家蔵)は、松平家八代斉恒(月潭)の意思にもとづいて、江戸の俳諧宗匠である伽羅庵麻中の撰によって編まれたことが下記の木佐春声書状から判明する。俳諧を通じた藩主との交流は松江藩領内の豪農らにとって荣誉あることだったのである。

(木佐春声書状)

尚々

玉句麻中子句少々懸御目申上候、紅葉御句ハ迫而懸御目度奉存候、以上

幸便啓上仕候、寒冷之刻ニ御座候得共、御揃被成愈御安泰被成御坐候事珍重不斜奉存候、然者来辰春興国内誹人諸流何にても一帖二被

遊、江戸へ御土産ニ被成度、此度伽羅庵麻中宗匠へ被仰付候得とも、御国内不案内ニ付貴公様方へハ私申上候様頼被申候、春興何にても三句宛十六七日迄ニ御集置被下候へハ、十八日私方取々差上、廿日迄ニ飛脚松江へ差出ス筈ニ御坐候間、貴公様方御句者勿論、其御地御連中様一人二ても余分奉頼候、御国内と申内松江杵築第一之御目当と相見へ候間、御心配可被下奉頼候、一人三句ツ、俳名印差出候得者、其内一句麻中子方被書出、御覧之上清書出来、当月末御飛脚ヲ以江戸へ被遣、摺物ニ相成、年内是非来早春下り候様被仰付、一冊ニ相成、御参勤之刻出雲土産ニ外御大名様御旗本様へ被遣度 思召に御坐候由極内々承申上候、此度之儀無料にて一人二ても余計宜趣ニ御坐候間、俳人ハ基方発句斗いたし候人二ても御目見之心得にてとふそ名対面被成候様御進メ可被下奉希候、

一、前方木幡屋御宿之刻、雪川君方御懇意被為成下候御由緒ヲ以御目通ヲも仕御供いたし候節、発句も奉入御覧、其節御惣方様より御賀章も一冊ニして御覧ニ入候処、国内ニ俳人大分有之儀御歎被遊、当時ハ猶亦余分ニ相成候哉と 被思召、御取集被為成、御自慢被遊度趣ニ相聞へ候間、何分御心配被下候様奉頼上候、飛脚進上仕度奉存候所、幸便早々如此御坐候、

恐惶謹言

木佐春声

十月十日

広瀬浦安様

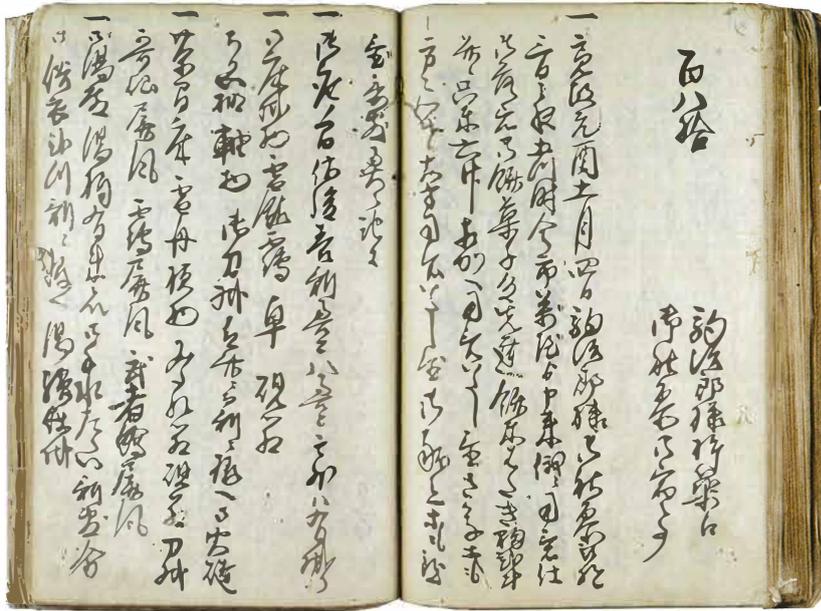
手銭有秀様

プロフィール

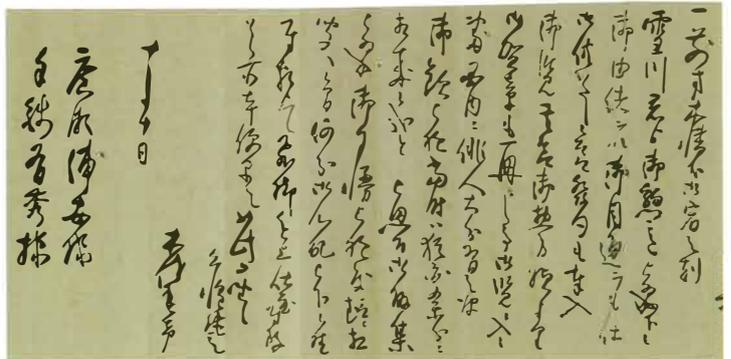
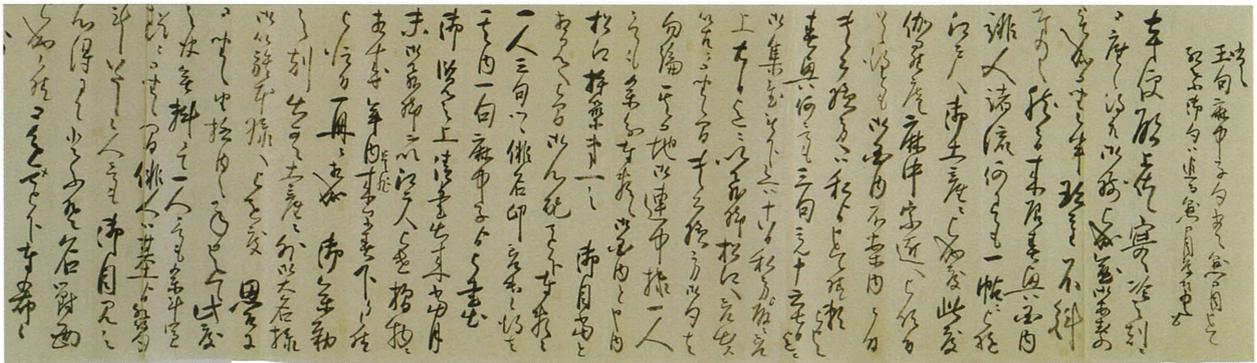
こばやし じゅんじ (島根大学法文学部教授)

一九六九年二月二十二日、岐阜県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程退学。日本近世史を専攻。特に近世の仏教と神道の関係や浄土真宗における教学論争、異端信仰などについて研究している。また松江市史編纂事業では近世史部会長をつとめている。

著書『お殿様のお成り』(松江市ふるさと文庫1、2006年)、
『松江城下の町人と能楽』(山陰研究ブックレット3、2014年)



(参考図版1 萬日記五番)



(参考図版2 木佐春声書状)

【シンポジウム】

資料から再発見する江戸時代の底力

— 手銭家資料（文書・古籍・美術）を繋ぎ活かす取り組み —

日時 令和元年（二〇一九）九月十四日（土） 午後一時半～五時
会場 島根大学法文学部多目的室
参加者 五十名

《プログラム》

■はじめに

出雲文化活用プロジェクトについて

野本 瑠美（島根大学法文学部准教授）

手銭記念館と手銭家資料について

佐々木 杏里（手銭記念館学芸員）

■基調講演

手銭家蔵書から見る出雲の文芸

田中 則雄（島根大学法文学部教授）

■デモンストレーション

手銭家資料のデジタル化と公開について

昌子 喜信（島根大学附属図書館）

■報告

杵築歌壇資料が語るもの—和歌史の見直しのきっかけとして—

久保田 啓一（広島大学大学院文学研究科教授）

近世俳諧史と大社俳壇

伊藤 善隆（立正大学文学部准教授）

《概要》

令和元年（二〇一九）六月、手銭記念館と島根大学の間で包括連携協定が締結されたのを記念し、シンポジウムを開催した。江戸時代から続く手銭家には美術工芸品の他に多数の古文書や古籍が伝わる。島根大学と手銭記念館は十年以上にわたり、同家の文献資料の調査研究とデジタル化による公開を進めてきた。本シンポジウムでは、調査から明らかになった江戸時代出雲の文芸活動や同家所蔵資料の意義について報告し、大学教職員や市民五十名が集まった。

田中則雄氏による基調講演では、手銭家の多様な蔵書は同家歴代の人々が文芸活動に携わる中で収集・蓄積・継承したものであること、文芸活動には二つのピークがあったことを指摘した。個別報告では、近世の文学・歴史学を専門とする三名が登壇した。久保田啓一氏は同家所蔵の和歌関係資料から杵築歌壇の実態と特徴を明らかにし、今後の地方文芸資料研究の展望を示した。伊藤善隆氏は同家俳諧関係資料から、近世俳諧史と出雲俳壇の史的位置づけの見直しを図り、小林准士氏は、寛政元年の松平雪川の出雲大社参詣に関わる文化交流や文政三年の『春帖集』編纂において手銭家が果たした役割を史料から解き明かした。

手銭家所蔵資料から、全国的な動向と連動する出雲の文芸活動や、文芸活動の背後に横たわる松江藩と豪農層の関係も浮かび上がった。また従来の文学史観を捉え直すような提言もなされた。更なる調査の進展が期待されるとともに、手銭家の調査のみならず、各地域における文献資料調査の重要性が再確認されたシンポジウムであった。

注記

田中則雄氏の基調講演については、『論考 手銭家蔵書と出雲の文芸活動』（平成二十六年出雲文化活用プロジェクト報告書）を参照していただきたい。
久保田、伊藤、小林三氏の報告内容については、論考及び報告要旨として当報告書に掲載した。

寛政元年の松平雪川の出雲大社参詣に見る文化交流

小林 准士（島根大学法文学部教授）

■ パネルディスカッション

司会 田中 則雄

パネリスト 久保田 啓一

伊藤 善隆

小林 准士

佐々木 杏里



《 パネルディスカッション 》

田中 長時間にわたってお聴きくださってありがとうございます。最後のまどめに向けてもう一息、頑張りたいと思います。

会場の皆様から多くのご質問いただきました。何人かの方から「今回、中国文学・漢文関係のことが出てきていないけれど、そのあたりは手銭家においてどのようなになっているのだろうか？」というご質問を頂戴しております。

実はこの方面のことは、無いわけではなく、手銭家の学問文芸の中で非常に大きな比重を占めています。そして重要な書物が含まれています。手銭家歴代も漢詩・漢文に深い素養を持っていました。そこで、今日会場にお越しの要木純一先生にプロジェクトメンバーに入っていただいております。手銭家の漢学、漢詩漢文関係ですね、これも重要な研究テーマです。今日のお話は、和歌俳諧中心だったのですが、同じ人が漢詩漢文をやっていたり同じ年代でやっていたりしますので、そこはつながってくるものと思います。

それから儒学書。儒学関係の書物もありますので、その辺のところを手銭家歴代においてどういう意味を占めるか。それから出雲大社があるわけですが、その神道との関係でどういう意味を持つてくるか。そういった大変意義深いご質問もいただいています。これらも、これからの重要な研究テーマです。ありがとうございます。

それではディスカッションに入ります。伊藤先生、いただいたご質問の中でいわ



ゆる第二芸術論のような、近代の見方があるのですが、そういうものを傍らに置いたとき、手銭家あるいは大社にとって俳諧はどういう意義を持ち、どのような位置づけになるのかという問題です。少し大きな質問ですが、いかがでしょうか。

伊藤 第二芸術論とは、五・七・五の俳句を一つの芸術作品と捉えようとしても、じつは作者の個性がそれほど見えないではないか、という批判です。つまり、芭蕉の有名でない句と、小学生が上手く詠んだ句とを、作者の名前を隠して比べてみると、ほとんど区別がつかない。むしろ素人の小学生の句の方が良いと感じられる場合もある。そのような中途半端なものを芸術作品と呼べるのか、という趣旨の批判です。

もともと、俳句の五・七・五は、江戸時代は俳諧といつて、五・七・五に七・七を付け、そこにさらに五・七・五を付ける連句という形式の文芸でした。連句の場合、一句一句が完結してしまうと、次の句の付けようがありません。つまり、一句一句の作者は、自分の句の全てをコントロールして完結した表現を目指すのではなく、次の句を付ける人に自分でも思ってもいかなかったような解釈の余地を残しておく。そうすることで連句の進行に変化を促す。そのような詠み方が良いとされたのです。

現代の感覚から言えば不思議な文芸ですが、江戸時代の人にとってはそれが当たり前で、むしろ近代的な意味での芸術作品の概念とはかなり異なる意識でやっていたと思います。

そういう意味では、例えば芭蕉の句は、逆に近代的な読み方ができる要素もかなり備えているので、現代人が読んでも面白い。だから研究の中心にもなる。しかし、芭蕉以外、とくに一般の人々が楽しんで



詠んでいた句の場合には、作者の個性といった近代的な芸術の要素を見出すことは難しい。そうした、江戸時代の俳諧の文化のあり方を理解した上で、当時の人たちが俳諧の何を面白いと思っていたのか、そういう問題意識で、当時の作品や資料を読んだり見たりしていくことが、手銭家や大社に限らず、江戸時代の人たちの俳諧を理解する上ではポイントになるかと思えます。

上手くまとまらないのですが、一応そういう答にしておきたいと思えます。

田中 その観点と関係させて考えたいのですが、久保田先生のお話の中では和歌と俳諧とが同じ場で営まれているという。これは同じ人によって、あるいは同じ師匠によってということでした。そのところが非常に重要だということをお話し下さいました。

それはもしかしたら文学に対する価値観や思想などといった点において、何か、大社・出雲の地に独特な見方があったことかもしれません。それ以前に、今伊藤先生がおっしゃったことに関係すると思いますが、いわば生活の中で文芸というものをどのように位置づけていたのか。自分も実作に加わっていくことへの意識、人との交わりとか、文学をやる上で色々な、もう少し広い意味の幅というか、そういったものがあつたのではと推測しながら先生の話を聞いていました。このような観点から説明を補足いただけますか。

今日いただいた配付資料の中で、最後の部分が時間の関係で割愛になってしまったのですが、そちらについても何かそういった観点と絡めてお話しいただけることもあればお願いします。

久保田 私の資料の最後の所に「中臣典膳の狂歌、およびさの子の狂歌に対する典膳指導例」を挙げています。この資料は典膳さんの画像を刷り物にして、そこにさの子さん宛にはここにありますように狂歌が書かれております。全く同じ刷り物の絵を有頼さんにも出して、それに

は俳諧が書いてある。つまり俳諧の発句が書いてあるわけですね。ですから完全に典膳さんの中では俳諧と狂歌が一体となった感覚です。これはおそらく典膳さんの中ではこれらを区別するという意識はなかった。だから要するにみんな楽しめるばいんだというような感じだったと思うんです。

これらの狂歌の中でひとつご紹介しておきたいものがあります。(資料の)五首目のものです。

世人予を多能也といひしも、つら

く省みれば皆石臼芸にして、自慢の鼻をれて挽木の如し。されどまけぬ氣にて

八人と笑はゞわらへ 老樂は月によつたり花によつたり

世間の人は私を大変色んな方面に能力を発揮する人だと言ってくれます。しかしよくよく考えるとそれらは「皆石臼芸」、これは石臼でガリガリやっていたくさん色々なものを作るけれどもこれらはバラバラであり、まとまりがなく荒っぽい。要するにひとつひとつには価値がないんだという言い方です。それで自慢の鼻が折れて「挽木の如し」、これは石臼についている取手のことです。しかし「されどまけぬ氣にて」、それでもやっぱり私はそういう自分でありたいと言って、この狂歌を詠むわけです。

「八人」とは八人芸、これは一人で八人の役をやるという事で、何でも屋なんです。だから八人芸と笑うなら笑ってもいいよ、と。年取って私は「月によつたり花によつたり」、場合によっては月をテーマに作品を詠み、花をテーマに詠んだりする。「よつたり」は、そこで歌会などを持つ、寄るといふ意味と、四人ですね。四人・四人で八人になるんだということです。これに「はつたり」も重ねてあります。要するに自分は何でも



できるんだけど、それがどうも自分の中では今一つ割り切れない。しかしやっぱり自分はこれでいいこうという。なんだか妙に屈折しているんですけども、やっぱりこういうあり方がさの子さんを含む文壇の中では求められていたんだろうと思います。だからあまりこだわりはなかったんだろうな、という感想を私は持っています。

それからそのあとに狂歌三節として資料にあげていますが、この狂歌はさの子さんの作品です。三節というのは俳諧で歳旦とか春興とか歳暮とか、そういった題で詠むものなんですが、それを狂歌に当てはめているわけですね。しかも「おもしろく候」「めづらしく候」というのは典膳さんがつけた褒め言葉なんです。これは完全に和歌の指導のやり方を踏まえている。ですから俳諧と和歌と狂歌がもう彼の中では一体となっていて、その時その時で自由自在に作品が生まれる。それがあの時代のあの地域の特徴であったと言わざるを得ないと思います。

田中 お話の中にありました「学なのか、道なのか」というところですね。会場からのご質問の中にもその部分に触れてくださっているものがあります。もし仮に、道の営みとして出雲に入ってそれだけが広まっていたとしたら、このような展開というのはいかなか難しかったということになりますか。

久保田 指導者がひとつひとつの道にこだわった人であれば、こういうあり方は絶対お互いに許せないとはいえませんが、それはもうこれ独特のあり方だと思っています。

田中 小林先生、大名あるいは大名の近くにいる人たちが江戸の人々と出雲の人々を結ぶひとつのポイントの役割を果たしていたというお話をしてくださった



と思います。俳諧において、大名あるいはその近くにいる人とどういった直接の交流ができるということは一つの榮譽にもなるということでした。そういう点から考えても、文芸的な営みの意味をもう少し広く考えていいのかもしれない。そのあたりの点に関して、全体のお話の中でどうお感じになったか、お聞かせいただけたらと思います。

小林 やはり江戸時代の文芸を支える階層ですよね。先ほど「道から学へ」といった話がありましたけれども、その転換のところで指導者は地元の人々に支えられていくという指摘は、非常に面白くお伺いした所です。それは江戸時代の社会の仕組みが反映されているのかなと思います。

特に出雲の場合には、村の庄屋クラスじゃなくてももう少し上の階層、郡の地域運営や経済を支えている階層が文化的なパトロン役割を果たしているのです、それが藩との関係を規定してきますし、和歌や俳諧の学び方も規定していくということで、重要な指摘であったと思います。

近世後期になると雅楽などもそのような展開があつて、京都の三方楽所の楽人などが松江城下の森脇家や穴道の木幡家などと関係を結んで雅楽が幕末に普及していくという動きがありますけれども、色々な面でそういうことが出てきていると思います。

田中 小林先生のコメントの中にも出てきたことですが、指導者が一つの重要な要素になるように思います。

出雲地方の文芸の営みは、「道」ではなく「学」なのですが、やはり「学」であるからには、きちんと教える人がいないと成り立たない。単なる趣味とはまた違うはず。教える人がいて、そこに人が集うということですが、そうするとやはり指導者を支える層、そういう役割をする人が



当然必要になってくるわけです。そういう観点から考えた時にやはりこの手銭家の意義、果たした役割というのは、また新しい捉え方ができるのではと、小林先生のコメントをお聞きして考えました。

それでは佐々木さん、今日のお話全体をお聞きいただいて、その手銭家の膨大な資料を管理し公開していくという立場から、今後どのようなことをやってみたいか、抱負でも課題でも結構です、一言コメントを頂戴できますか。

佐々木 私がやってきたのは、資料を見つけること、その資料の意義を正しく見極めてくださる方を見つけて資料とその方を引き合わせる、という事だっと思つています。文書関係だけではなくて美術資料など全部同じですけれども。それをやることで、全体として江戸時代というのはどういう時代だったのか、知らなかった側面が見えてきた。私たちが時代劇で見っていた、殿様を見たら草履を脱いで頭を下げるといったような、単純なものだけではなかったのだ、という事も実感として分かってきたというのがあります。

ですから、皆さんがおっしゃいましたように、一次資料の大切さをもっとたくさんの人に知っていただきたいです。一軒の家に残っていたものでもこれだけの事が分かったのであれば、周囲の何軒かのお家から出てきたら広がりをもっと分かれますし、広げ続けていくことで今日出たような、他の地域との比較ということにもつながっていくと思います。他の地域が（同様に）やってくださるまでなんとかこの状態を保つていくことができればと考えています。

田中 手銭家の資料の特色であり、かつ一番優れた点と言えるのは、多様性だと思えます。ご紹介にあつたように美術品に始まり文書・古典籍など大きな広がりを持っています。今日はご当主がいらっしゃっております。全て残すという方針で継承して来られたこと、本当に敬意を表したいと思えます。

多様なものが残っている、それから量が膨大である。従って、それらをつなぎ合わせることによって人の営みの具体的な部分が非常に克明に出てくる、そういう典型ではないかと思えます。そのいくつかの像を私たちは研究の中で見出しつつあります。それが今日のお話にありましたように出雲だけの問題なのか、いやそれだけではないのではないかと、といった議論に入る段階にあります。そのような問題提起・発信のできる基盤というものが手銭家にあると考えます。

それからひとつ、私も文学を専攻していますので強く感じたことをもう一度繰り返します。

文学の研究というのは、最も優れた作者が書いた名作を現代的な観点から読んで、いかに人生に資するかということを論じていく、そういう方向へ行きがちです。けれども文学の営みというのはそれだけでなく、名作の範疇には入ってこなかったもの、それも含めて文学である。改めて、文学的な営みというのは何なのかということをもう少し広く捉え直すことの必要性も、手銭家の資料は教えてくれていると思えます。

最初にご紹介のありました通り、島根大学と手銭記念館は包括協定を結びました。これにより、いよいよ相互の深い関係の中で研究を進めていこうということになりましたが、今日シンポジウムを開き、皆様からもご質問をいただき、まだまだ探究すべきたくさん課題があるということを改めて実感しました。今後も新たな発見のご報告ができるように研究を続けていきたいと思えます。本日は長時間にわたりご清聴いただきありがとうございます。



■ シンポジウムアンケート

◇回答枚数19枚 ◇来場者50人

| | | | | | | | |
|------------------|--------|---------|-----------|-----|--------|-----|-------|
| 年代 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代以上 |
| | 0 | 2 | 1 | 2 | 2 | 5 | 6 |
| 居住地 | 松江市内 | 県内 | 県外 | 区分 | 学生 | 職員 | その他 |
| | 13 | 5 | 1 | | 0 | 3 | 17 |
| シンポジウムを何で知りましたか？ | チラシ | WEB・SNS | 友人 | 関係者 | その他 | | |
| | 5 | 1 | 3 | 7 | 5 | | |
| 内容はいかがでしたか？ | 大変良かった | 良かった | どちらともいえない | | 良くなかった | 無回答 | |
| 基調講演・報告 | 11 | 8 | 0 | | 0 | 0 | |
| ディスカッション | 5 | 4 | 1 | | 0 | 9 | |

- ・島根の地にも風流を解する人物がいたことに安堵しました。伊藤先生たいへんユーモラスで楽しめました!! (30代)
- ・アーカイブする事の意義が感じられました。デジタル化により世界に情報が広がり地域の価値が向上します! (60代)
- ・資料の内容が豊富で、読み上げられるだけでは消化不良。エピソード、具体例など映像で紹介してほしい。(70代)
- ・学部の行事であるからという事で、実は義務的な気持ちで参加したが、参加して本当によかった。本当に豊かな気持ちになれた。文化の力だと思う。専門分野外の話を知ることが重要だとあらためて認識した。(50代)
- ・手銭家の由来、大社俳壇の興盛、ADEACの活用等、知らない事をたくさん勉強できた。(60代)
- ・先生方のお話が分かりやすく大変勉強になりました。江戸時代の生活・文化のイメージができました。(40代)
- ・知らない事が多くとても勉強になり今後とも何かあれば参加してみたい。(60代)

島根大学・手銭記念館包括連携協定締結記念
3プロジェクト合同成果報告シンポジウム

—手銭家所蔵資料(文書・古典籍・美術)を繋ぎ活かす取り組み—

資料から 再発見する 江戸の底力



シンポジウム チラシ

2019年9月14日(土) 13:15 ~ 17:00
12:45 開場

島根大学法文学部棟2階 207(多目的1)室

入場無料
申し込み不要

基調講演 13:30 ~ 14:30

手銭家蔵書の形成過程を探る
田中 則雄 (島根大学法文学部)

報告 14:45 ~ 15:45

杵築歌壇資料が語るもの —和歌史の見直しのきっかけとして—
久保田 啓一 (広島大学大学院文学研究科)

近世俳諧史と大社俳壇 —手銭記念館所蔵資料から見えてくるもの—
伊藤 善隆 (立正大学文学部)

寛政元年の松平雪川の出雲大社参詣に見る文化交流
小林 准士 (島根大学法文学部)

パネルディスカッション 15:50 ~ 16:50

- 主催 (公財)手銭記念館、島根大学法文学部山陰研究センター、島根大学附属図書館
- 助成 平成31年度文化庁地域の博物館を中核としたクラスター形成事業



*3プロジェクト:平成31年度文化庁地域の博物館を中核としたクラスター形成事業「出雲文化活用プロジェクト」、島根大学法文学部山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」、図書館振興財団平成29年度提案型助成事業「山陰地域をつなぐ史資料のデジタル化と活用事業」

【問い合わせ先】島根大学法文学部山陰研究センター
電話: 0852-32-9833 / FAX: 0852-32-6125

《和食プログラム》

料理再現〜手銭家に伝わる江戸時代の献立

これまで数年に亘っておこなってきた料理ワークショップの成果を活用し、江戸時代から受け継がれている和室で当時の食器や室礼を用いて、雰囲気も楽しみながら再現料理を召し上がっていただくという、観光事業とリンクさせた企画。

今回は、十二月六日におこなった料理ワークショップの献立を基に、松平治郷（不昧公）の弟、松平衍親（雪川公）が、寛政元年（一七八九）に出雲大社へ参詣した折にお出しした本膳料理を再現した。

開催日 二〇二〇年三月二十日（金・祝）

昼の部 午前十一時半〜

夜の部 午後五時半〜

会場 手銭家 上の間

参加者 各回五名 計十名

料理 安藤登 安藤竜一（日本料理 登む）

献立

落着

ぜんざい 奈良漬 唐川番茶

本膳

皿 鯛焼物 摺り生姜

猪口 いり酒

味噌仕立

汁 牡蠣しんじょ 椎茸 青味

飯 香物

二の膳

薄葛引

平椀 松露 おとし蒲鉾 山葵

硯蓋 蒲鉾 九年母よせもの 香茸 焼き芋 氷こんにゃく



御吸物 十六島海苔
御肴追々

皿 鯛刺身 へぎ鮑

穀焦にて 盛合 花麩 さらし牛蒡 焼豆腐



《ツアー》

欧米豪向け業者フアムトリップ（二泊三日）

開催日 二〇二〇年三月二十二日（日）～三月二十四日（火）

参加者 五名

和食体験を軸に、美術館、作家工房などを訪問する、二泊三日のフアムトリップを実施。島根県から助成を受け、出雲観光協会からは助成とともに、出雲市内の訪問先の旅行手配についてもご協力いただいた。

欧米豪の旅行者は未だ発見されていない（極端に観光地化されていない）地域への旅行に最も関心があるので、その好奇心に訴えかけるようなコンテンツ、歴史、自然、アート、文化、を軸にした訪問先やアクティビティの選択を行い、旅行代理店だけでなくホスピタリティビジネス、ジャーナリストといった旅に関する各分野の専門家に参加を呼びかけた。

参加者には、今後どうすれば島根に関する認知が広まり欧米豪の旅行者が訪れるようになるかという長期的な視点でのアドバイスをいただいた。また、ジャーナリストには英語での記事を執筆、公開をお願いした。

翌年度以降は、今回の視察に参加いただいた旅行業者による国内在住の外国人、欧米豪からの旅行者を対象とした、具体的なツアーの実現を目標に協議を進める。併せて、参加しなかった旅行会社にも今回の写真などを活用してプレゼンテーションを行い、日本へ視察に来る際には出雲へも足を伸ばすことを勧める。数年をかけて、島根に関する認知が広まり、個別にプッシュをしなくても、ある一定数の欧米豪の旅行者が訪れるような自然な循環が生まれることを想定している。



今後地元各関係者と連携しながら、旅行者に様々なプランを提案できるように、また各種のご要望に答えられるよう、目的地や交通機関などとも連携しながら受け入れ体制を確立していきたい。

助成：島根県、一般社団法人出雲観光協会

ART AND TRADITION IN IZUMO
A unique discovery program sponsored by the British Embassy and the Japanese Consulate
22-24 March 2020

[Day 1] Izumo
Afternoon session (14:00-17:00) at the Izumo Museum
Izumo Museum, 1-1-1 Honmachi, Izumo City, Shimane Prefecture 684-8501, Japan
Tel: +81 858 22-1111

[Day 2] Izumo
Morning session (10:00-12:00) at the Izumo Museum
Izumo Museum, 1-1-1 Honmachi, Izumo City, Shimane Prefecture 684-8501, Japan
Tel: +81 858 22-1111

《ウェブサイト》

多言語化

平成三十年度に完成した、出雲地方の旧家に伝来する美術工芸コレクション、および伝統的な住居と庭園を保存、公開しているミュージアム七館を紹介する英語ウェブサイト

Izumo Heritage Museums <https://izumomuseums.org>

について、日本語版、フランス語版、韓国語版、繁體中文版、簡体中文版のサイトを作成した。また、各館の動画を撮影しサイト上で公開した。公開にあたっては、包括連携協定を締結した島根大学の留学生らに、ネイティブ・チェック等の協力を依頼した。体験プログラムのページを設け、二〇二〇年三月に開催する「料理再現」手銭家に伝わる江戸時代の献立」の告知を行った。

制作：non-standard world 株式会社



ウェブサイト

韓国語



フランス語



繁体中文



簡体中文



《手銭記念館と島根大学の包括的連携に関する協定》

島根大学法文学部山陰研究センター（以下「山陰研究センター」）と附属図書館は、手銭記念館と共同で同館所蔵資料の調査・研究及びデジタル化と公開事業に取り組んできた。山陰研究センターによる「山陰研究プロジェクト」（平成十六年～二〇〇四）、「文化庁の助成を受けた「出雲文化活用プロジェクト」（平成二十六年～二〇一四）」、詳細は本報告書の《プロジェクト事業履歴》参照）、図書館振興財団の助成を受けた「山陰地域をつなぐ史資料のデジタル化と公開事業」（平成二十九年度～二〇一七）と平成三十一年度～二〇一九）のように、島根大学と同館による複数のプロジェクトが平行して実施されてきたところである。

これらのプロジェクトの実績をもとに、引き続き資料の調査・研究及び公開と活用をはじめとする共同事業をより安定的・発展的に進めるために、令和元年（二〇一九）五月二十八日、手銭記念館と島根大学との包括的連携に関する協定が締結された。連携協定を結ぶことで、今後、次のような効果を期待することができる。

■ 多様な分野の研究者ネットワークの形成による総合的な研究の推進

これまで、文学関係、美術・工芸関係など個別の分野ごとに調査・研究が進められていたが、今後は、これまで手付かずだった記録資料を対象とした歴史的な研究を開始し、歴史、文学、美術・工芸、建築などの多様な分野の研究者のネットワークを形成することで、江戸時代の大社地域及び島根に関わる様々な側面を多角的、総合的に明らかにしていくことができる。

■ 学生の教育の場としての活用

インターンシップや歴史・古典文学等の授業において、手銭記念館の所蔵資料を対象とした実習の機会を本学学生に提供し、古文書・古典籍の整理方法や展示の実習をおして、地域に根ざした実践的な教育を効果的に

実施することができる。

■ 地域振興への貢献

NHK「日曜美術館」において「外国人を魅了する日本の美術館」として紹介されたことが示唆する通り、手銭記念館と島根大学との協力のもと、同館所蔵資料の意義や価値を解明、発信していくことは、地域振興への学術の貢献、寄与を示すことにつながり得る。



《プロジェクト事業履歴》

平成二十六年(二〇一四)

■江戸期の出雲文化再生と公開のための各種行事の開催

- (1) 手銭家蔵書からみた出雲の文芸関連行事
- 企画展示「江戸力く手銭家蔵書からみた出雲の文芸」
- 連続講座「手銭家蔵書からみた出雲の文芸」 全3回
- 「手銭家歴代の和歌活動―和歌史上の意義を中心に―」

久保田啓一

「江戸時代末期の大社歌壇」

芦田耕一

「俳諧史の中の出雲・大社・手銭家」

伊藤善隆

論考 手銭家蔵書と出雲の文芸活動

田中則雄

手銭家歴代の和歌活動

久保田啓一

江戸時代末期の大社歌壇

芦田耕一

俳諧史の中の出雲・大社・手銭家

伊藤善隆

シンポジウム「手銭家蔵書からみた出雲の文芸」

基調講演・司会 田中則雄

パネリスト 久保田啓一・伊藤善隆・芦田耕一・佐々木杏里

(2) 手銭家蔵書を活用したワークショップ関連行事

ワークショップ「大社 能を知る集いく奈良絵本を読む」

ワークショップ「能と狂言を体験しよう!」

ワークショップ「江戸時代の料理の再現く秋の茶懐石」

■江戸期出雲文化の再生と公開のための調査及び環境整備

(1) 資料調査と資料解読

資料調査 手銭家文芸関係資料調査

資料解読 『萬日記二番』 解読

(2) 資料デジタル化と公開

資料デジタル化

デジタル・アーカイブからの公開

平成二十七年(二〇一五)

■手銭家所蔵資料を活用したワークショップ関連行事

- (1) ワークショップ「散らし書きをしてみよう!」
- (2) ワークショップ「江戸時代の料理再現くおもてなし料理」
- (3) ワークショップ「能と狂言を体験しよう」
- (4) ワークショップ「大社能を知る集いく舞歌の身体」

平成二十八年(二〇一六)

■「江戸時代から続く松江藩を支えた旧家」ミュージアムの国際発信のための環境整備事業

- (1) 外国語版館内ガイド・パネルの作成
- (2) ガイドブック及びウェブサイト作成の為の取材

■手銭記念館所蔵資料を活用したアウトリーチ

- (1) 連続講座「古典への招待」～古筆と和歌を中心に～(全5回)
- (2) ワークショップ「能と狂言を体験しよう!」

- (3) ワークショップ「大社 能を知る集い」
～能・狂言とお酒の深い関係～

- (4) 江戸時代の料理再現

宴の献立

親子和菓子作り体験

■他機関での展示

島根県立古代出雲博物館展示室

「出雲の婚礼」

島根大学附属図書館企画室

「江戸力～手銭家蔵書から見る出雲の文芸」

■『萬日記』目次解説

平成二十九年度(二〇一七)

■手銭記念館所蔵資料を活用したアウトリーチ

- (1) 連続講座「古典への招待」～和歌を中心に～(全5回)

- (2) ワークショップ「能と狂言を体験しよう!」

- (3) ワークショップ「大社 能を知る集い」

～能と神楽 古代の息吹～

- (4) ワークショップ「江戸時代の料理の再現～初夏の茶懐石～」

- (5) ワークショップ「金継ぎをしてみよう」(全5回)

■企画展と関連事業

- (1) 企画展「出雲今昔 二」～江戸の旅事情～

- (2) 講演会「江戸時代を学ぶ」(全3回)

「不昧公茶室を巡る近代数寄者の普請道楽」 田野倉徹也

「大社参詣と札所巡り」 岡宏三

「俳人の紀行」 伊藤善隆

■他機関での展示

島根県立古代出雲博物館展示室「手銭家資料と大社の芸能」

島根大学附属図書館企画室「江戸力～献立いろいろ」

平成三十年度(二〇一八)

■観光分野と連携した環境整備、情報発信

- (1) 外国人観光客・居住者に向けた環境整備、情報発信

- (2) 英語版ウェブサイト「Izumo Heritage Museums」の

作成

- (3) SNSのターゲット広告を利用した広報

■和食体験プログラムの開発

■ワークショップと多様な対象者のための学習講座

- (1) 連続講座「古典への招待」～『源氏物語』を楽しむ～(全4回)

- (2) ワークショップ「大社 能を知る集い」

～能と狂言の世界 事始めから未来まで～

- (3) ワークショップ「江戸時代の料理の再現～冬の茶懐石～」

■他機関での展示

「さの子さん、上方を旅する〜江戸の旅事情〜」

島根県立古代出雲博物館展示室

島根大学附属図書館企画室

平成三十一年度（二〇一九）

■観光分野と連携した環境整備、情報発信

- (1) 外国人観光客・居住者に向けた環境整備、情報発信
- (2) ウェブサイト「Izumo Heritage Museums」の多言語化
- (3) SNSのターゲット広告を利用した英語での広報

■和食体験プログラムの実施

■ワークショップと多様な対象者のための学習講座

- (1) 連続講座「古典を楽しむ」〜歌仙を学ぶ〜（全4回）
- (2) ワークショップ「大社 能を知る集い」
〜能と狂言の世界 事始めから未来までII〜
- (3) ワークショップ「能と狂言を体験しよう！」
- (4) ワークショップ「江戸のおもてなし料理」
- (5) 連続講座「古文書解読講座」（全12回）

■他機関との連携活動

館外展示「手銭家蔵書から見る出雲の文芸―その二―」

島根大学附属図書館

島根県立古代出雲歴史博物館

■シンポジウム

資料から再発見する江戸時代の底力

―手銭家資料（文書・古典籍・美術）を繋ぎ活かす取り組み―

基調講演 田中則雄

デモンストレーション 昌子喜信

報告 久保田啓一

伊東善隆

小林准士

パネルディスカッション

司会 田中則雄

パネリスト 久保田啓一・伊東善隆・小林准士・佐々木杏里

■島根大学との包括協定締結

《手銭家資料調査の概略》

蔵書調査のはじまり

平成十六年（二〇〇四）、出雲市立大社図書館で開催されていた古文書講座において、講師の芦田耕一氏（当時 島根大学法文学部教授）が江戸時代後期に大社で行われていた和歌活動を取り上げられた。中心メンバーとして手銭家七代の妻だったさの子の名もあがり、当館とさの子の繋がりを知った芦田氏から手銭家が所蔵する杵築歌壇関連資料を見たいと希望があった。

手銭記念館では平成七年（一九九五）、十二年（二〇〇〇）の2回、所蔵している典籍や短冊、詠草などによる、「杵築文学」をテーマとした展示をおこなっていたが、所蔵資料の整理や調査は手つかずのままであったので、調査に来館した芦田氏に、今後、どう整理し扱っていけばよいのか相談した。

それをきっかけに、島根大学法文学部山陰研究センター（以下「山陰研究センター」）の事業として所蔵資料調査を行うこととなり、平成十七年（二〇〇五）から十八年（二〇〇六）にかけて行った調査で、約五百点の典籍等を確認し仮目録を作成した。

これらの資料については、国文学研究資料館の調査活動として調査カードを取ることにになり、平成十九年（二〇〇七）から今年度まで、年に一日または二日の日程で、調査カード作りを続けている。

調査の過程で、短冊、詠草、写本、一枚摺といった、典籍資料以外の和歌、俳諧、漢詩、句文等の資料が大量に伝来している事も、わかってきた。

現在（令和元年度）判明している資料数は、典籍類（蔵書類）約六百五十点（約千二百冊）、その他資料（短冊、詠草、一枚摺、書状等）約千百点あまりである。

平成十七年（二〇〇五）秋には、調査で分かった成果を活用して【手銭さの子と杵築文学】という企画展と、芦田耕一氏を講師に迎えた講演会を行った。

古文書資料

『大社町史』作成のために長く大社町に貸し出していた、『萬日記』、『御用留』、その他種々の古文書類が、市町村合併にともなって平成十七年（二〇〇五）以降返却された。

平成十九年（二〇〇七）には、これら旧大社町から返却された古文書類と、所蔵資料調査で確認できた資料（伊能忠敬関連文書、『萬日記』にある冠婚葬祭の記載、『御用留』にある藩の通達等、杵築文学関連書籍、実録物や往来物）を展示し、江戸時代の大社と人々の暮らしを考える企画展【江戸力！その壱】を開催した。

文書類が返却されたことで、江戸時代の手銭家について、また手銭家が果たしていた「大年寄」や「御用宿」といった役割について、詳しく知ることになった。

これが、平成二十二年（二〇一〇）、文化庁の助成を得て宍道鬼古館（松江市宍道町）、荒神谷博物館（出雲市斐川町）と共に企画した事業【三館合同企画展 本陣被仰付く名画が伝える旧家の文化】に繋がった。この企画は、大年寄、下郡、大庄屋といった役割を担っていた地域の旧家が、経済的にも文化的にも藩を支えていた事、公私に亘って果たした役割を、伝来する美術資料や文書史料によって紹介しようというもので、各館が古文書と美術資料を関連づけた企画展や講演会を開催した。

調査研究の進展

平成二十三年（二〇一一）に島根大学法文学部に着任した野本瑠美氏によって、手銭記念館所蔵の古筆切の調査が行われ、これまでは美術資

料とのみ認識していた所蔵作品を、文芸資料として調査研究尾を対象に入れていくことになった。

また、江戸時代中々後期の和歌と俳諧を専門とする研究者と知遇を得る機会がなく、直筆資料や一枚摺についての調査や考察が後回しになっていたが、平成二十三年度（二〇一一）から、国文学研究資料館基幹研究「近世に於ける蔵書形成と文芸享受」（代表 大高洋司 二〇一一～二〇一三）に加わったことで、近世和歌研究の久保田啓一氏、近世俳諧研究の伊藤善隆氏に、ご協力いただける事になった。

お二人による直筆資料や一枚摺の調査から、これまで殆ど知られていなかった江戸時代中期から後期の大社に於ける和歌や俳諧に関する活動について、具体的な様相、人間関係、中央文壇との交流などが掘り起こされ、江戸時代の大社の文芸活動が独自性を持った豊かな活動であったことが、初めて明らかになった。

また、平成二十六年（二〇一四）には、島根大学附属図書館、山陰研究センター、手銭記念館の三機関が合同で「出雲文化活用プロジェクト」を立ち上げ、文化庁の助成等を受けながら、文書資料のデジタル化やアーカイブ上での公開、手銭家資料の新たな活用などを、より積極的に進めていく事になった。

平成二十六年（二〇一四）には、これまでの調査研究成果をまとめた特別展【江戸力―手銭家蔵書から見る出雲の文芸―】展と、関連する連続講座、シンポジウムを開催し、大社の文芸活動についての新たな知見を広く紹介することが出来た。

おわりに

平成二十七年（二〇一五）以降も資料調査と、調査結果を基にした諸資料のデジタル化は継続して行っている。

島根大学附属図書館デジタルアーカイブ上での公開に加えて、新たに

クラウド型デジタルアーカイブシステムであるAD E A Cからの公開もおこなうことよって、より広く活用されるようになるだろう。

デジタル化によって内容を確認しやすくなった文書の記述から、使途不明だった伝来道具の名称や用途がわかったり、伝来する美術品がいつどのように使われたのかわかるような事例が増え、企画展にも文書を活用できるようになっている。

調査メンバーによって、蔵書や古文書類の解説・研究が進められていることで、江戸時代の社会生活や文化について次々と新たな知見がもたらされ、同時に新たな疑問や課題も出てきた。

平成十七年（二〇〇五）、仮目録作りから始まった私たちの調査は、このような十年あまりの蓄積を経て、個々の資料（史料）の意味や意義を考える段階から、地方に於ける文化享受のあり方、中央と地方の関係、手銭家歴代の興味や思考と時代との関係といった、より広い視点からの研究や考察へと進みつつある。

佐々木 杏里

《研究成果一覽》

平成二十二年度（二〇一〇年）

【論文】

- ・ 佐々木杏里「手錢さの子と杵築文学」（『アジア遊学』一三五号、勉誠出版、二〇一〇年七月）

平成二十三年度（二〇一一年）

【論文】

- ・ 小川陽子「翻刻 手錢記念館蔵『烏帽子折屏風』（『山陰研究』四号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一一年二月）

【講演】

- ・ 田中則雄・佐々木杏里『大社・手錢家の蔵書形成について』（第二回山陰研究交流会、島根大学、二〇一一年二月三〇日）

平成二十四年度（二〇一二年）

【論文・記事】

- ・ 山崎 真克「書評：芦田耕一著『江戸時代の出雲歌壇』（『山陰中央新報』、山陰中央新報社、二〇一二年五月二〇日）

平成二十五年度（二〇一三年）

【論文】

- ・ 伊藤善隆「季硯句集「松葉日記」—手錢記念館所蔵俳諧資料（一）—」（『山陰研究』六号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一三年二月）

- ・ 伊藤善隆「翻刻・手錢記念館所蔵俳諧伝書（一）—手錢記念館所蔵俳諧資料（二）—」（『湘北紀要』三五、湘北短期大学、二〇一四年三月）
- ・ 佐々木杏里「手錢家所蔵連句史料一覽（上）」（『山陰研究』六号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一三年二月）

【講演】

- ・ 田中則雄「大社・手錢家蔵書と江戸時代出雲の文芸活動」（第七回山陰研究センター講演会、島根大学、二〇一三年五月一八日）
- ・ 野本瑠美「手錢家の古筆資料」（第一四回山陰研究交流会、島根大学、二〇一四年一月二九日）

平成二十六年度（二〇一四年）

【論文】

- ・ 田中則雄「手錢家蔵書と出雲の文芸活動」（『手錢家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業（平成二六年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書）』出雲文化活用プロジェクト実行委員会、二〇一五年三月）
- ・ 久保田啓一「手錢家歴代の和歌活動—歌壇史上の意義を中心に—」（『手錢家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業（平成二六年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書）』出雲文化活用プロジェクト実行委員会、二〇一五年三月）

- ・ 芦田耕一「江戸時代末期の大社歌壇」（『手錢家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業（平成二六年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書）』出雲文化活用プロジェクト実行委員会、二〇一五年三月）
- ・ 伊藤善隆「俳諧史の中の出雲・大社・手錢家」（『手錢家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業（平成二六年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書）』出雲文化活用プロジェクト実行委員会、二〇一五年三月）

五年三月)

- ・伊藤善隆「百羅追善集『あきのせみ』—手錢記念館所蔵俳諧資料(三)—」
『山陰研究』七号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一四年一
二月)

- ・伊藤善隆「翻刻・手錢記念館所蔵俳諧伝書(二)—手錢記念館所蔵俳諧
資料(四)—」(『湘北紀要』三六、湘北短期大学、二〇一五年三月)
- ・伊藤善隆「俳諧資料の特性—近世における蔵書形成と文芸享受」とい
う視点から—」(『調査研究報告』三五号、大学共同利用機関法人人間文
化研究機構国文学研究資料館、二〇一四年)
- ・佐々木杏里「手錢家所蔵連句史料一覽(下)」(『山陰研究』七号、島根
大学法文学部山陰研究センター、二〇一四年二月)

【講演・シンポジウム】

- ・久保田啓一「手錢家歴代の和歌活動—歌壇史上の意義を中心に—」(出
雲文化活用プロジェクト連続講座第一回、手錢家、二〇一四年一〇年一
三日)
- ・芦田耕一「江戸時代末期の大社歌壇」(出雲文化活用プロジェクト連続
講座第二回、手錢家、二〇一四年一月一五日)
- ・伊藤善隆「俳諧史の中の出雲・大社・手錢家」(出雲文化活用プロジェ
クト連続講座第一回、手錢家、二〇一四年二月二三日)
- ・シンポジウム「江戸力—手錢家蔵書から見る出雲の文芸—」(島根県立
古代出雲歴史博物館、二〇一四年二月一四日)

基調講演 田中則雄「手錢家蔵書から見る出雲の文芸」

司会 田中則雄

パネリスト 芦田耕一、久保田啓一、伊藤善隆、佐々木杏里

平成二十七年(二〇一五年)

【論文】

- ・伊藤善隆「衝冠齋有秀追善集『追善華鬘粟』—手錢記念館所蔵俳諧資料
(五)—」(『山陰研究』八号、島根大学法文学部山陰研究センター、二
〇一五年二月)

- ・伊藤善隆「翻刻・手錢記念館所蔵俳諧伝書(三)—手錢記念館所蔵俳諧
資料(六)—」(『湘北紀要』三七、湘北短期大学、二〇一六年三月)
- ・佐々木杏里「広瀬百羅選『百人一句』—手錢家所蔵資料紹介(一)—」(『山
陰研究』八号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一五年二月)
- ・野本留美「手錢家所蔵の古筆資料」(『山陰研究』八号、島根大学法文学
部山陰研究センター、二〇一五年二月)

【講演】

- ・小林准士「近世出雲における親分子分関係とかな娘—手錢家『万日記』
を手がかりに—」(第二四回山陰研究交流会、島根大学、二〇一六年二
月二四日)

平成二十八年度(二〇一六年)

【論文】

- ・伊藤善隆「椎の本花叔編『椎のもと』—手錢記念館所蔵俳諧資料(七)—」
『山陰研究』九号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一六年一
二月)

- ・伊藤善隆「翻刻・手錢記念館所蔵俳諧伝書(四)—手錢記念館所蔵俳諧
資料(八)—」(『湘北紀要』三八号、湘北短期大学、二〇一七年三月)

- ・佐々木杏里「手錢有秀句文集『もくづ集』—手錢家所蔵資料紹介(二)—」
『山陰研究』九号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一六年一
二月)

【講演・シンポジウム】

- ・伊藤善隆「出雲俳壇史の中の大社俳壇の人々」(第四回いつも財団公開

講座第Ⅳ期、島根県立古代出雲歴史博物館講義室、二〇一六年二月一〇日)

・佐々木杏里「手銭さの子と女性の文学活動」(第四回いづも財団公開講座第Ⅳ期、島根県立古代出雲歴史博物館講義室、二〇一六年二月一〇日)

・シンポジウム「江戸後期に、杵築文学が隆盛になったのはどうしてか？」(第5回いづも財団公開講座第Ⅳ期、大社文化プレイス、二〇一七年三月一八日)

基調講演 田中則雄「大社・手銭家蔵書を通じて見る出雲の文芸活動」
シンポジスト 田中則雄、佐々木杏里 ほか2名

平成二十九年(二〇一七年)

【論文・記事】

・伊藤善隆「大社の俳人にみる師弟関係―『岡崎日記』前後―」(『日本文学』第六六卷一〇号、日本文学協会、二〇一七年一〇月)

・伊藤善隆「百羅俳文集『さりつ文集』―手銭記念館所蔵俳諧資料(九)―」(『山陰研究』一〇号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一七年)

・伊藤善隆「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(五)―手銭記念館所蔵俳諧資料(二〇)―」(『湘北紀要』三九号、湘北短期大学、二〇一八年三月)

・佐々木杏里『いそ枕』―手銭家所蔵資料紹介(三)―(『山陰研究』一〇号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一七年)

・佐々木杏里「茶会記から懐石を再現して」(『淡交テキスト 茶会記に親しむ』) 淡交社、二〇一七年一月一日)

【講演・シンポジウム】

・山陰研究センターシンポジウム「地域とつながる人文学の挑戦―山陰の

文学・歴史学・考古学研究から考える―」(島根大学、二〇一七年七月六日)

講演 野本瑠美「手銭家(島根県出雲市大社町)の歌書研究と古典講座」
講演 昌子喜信「A D E A C システムによる古典籍公開」

シンポジスト 田中則雄、野本瑠美 ほか3名

・伊藤善隆「出雲の俳諧について―これまで判ったことと今後の課題―」(手銭記念館共同調査・研究会、手銭家、二〇一七年八月二八日)

・伊藤善隆「俳人の紀行」(出雲文化活用プロジェクト連続講演会「江戸を学ぶ」第三回、手銭家、二〇一八年二月一七日)

・野本瑠美「古典への招待―古筆と和歌を中心に―」(出雲文化活用プロジェクト連続講座全5回、手銭家、二〇一七年八月四日、八月二五日、九月二九日、一〇月二七日、十一月二四日)

平成三十年(二〇一八年)

【論文】

・伊藤善隆「出雲俳諧史と大社俳壇」(『出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動』、今井出版、二〇一八年一月)

・伊藤善隆「晩翠居一鈞編『手曳能萬津』―手銭記念館所蔵俳諧資料(一一)―」(『立正大学大学院紀要』第三五号、立正大学大学院文学研究科、二〇一九年一月)

・伊藤善隆「花叔三回忌追善集『夢路の葉桜』―手銭記念館所蔵俳諧資料(十二)―」(『山陰研究』第一一号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一八年二月)

・佐々木杏里「手銭さの子と女性の文芸活動」(『出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動』、今井出版、二〇一八年一月)

- ・田中則雄「大社・手銭家蔵書を通じて見る出雲の文芸活動」(『出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動』、今井出版、二〇一八年二月)
- ・野本瑠美「翻刻『かたがたのせうそこうつし』」(『山陰研究』第二一号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇一八年二月)

平成三十一年度(二〇一九年)

【論文】

- ・伊藤善隆「『万家人名録』刊行前後―手銭有秀宛俳人書簡―」(『立正大学人文科学研究所年報』第五七号、立正大学人文科学研究所、二〇二〇年三月予定)
- ・伊藤善隆「阿井・大馬木連中撰『出雲筵』―手銭記念館所蔵俳諧資料(十・三)―」(『山陰研究』第二二号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇二〇年三月予定)
- ・伊藤善隆「近世俳諧史と大社俳壇―手銭記念館所蔵資料から見えてくるもの―」(『手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業(平成三十一年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書)』出雲文化活用プロジェクト実行委員会、二〇二〇年三月刊行予定)
- ・久保田啓一「杵築歌壇資料が語るもの―和歌史の見直しのきっかけとして―」(『手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業(平成三十一年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書)』出雲文化活用プロジェクト実行委員会、二〇二〇年三月刊行予定)
- ・佐々木杏里「手銭家所蔵「俳諧一枚摺」一覧―手銭家所蔵資料紹介(四)―」(『山陰研究』第二二号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇二〇年三月予定)
- ・野本瑠美・安田はるか「翻刻『ちとせの舎御せうそ』」(『山陰研究』第二二号、島根大学法文学部山陰研究センター、二〇二〇年三月予定)

【講演・シンポジウム】

- ・島根大学・手銭記念館包括連携協定記念シンポジウム「資料から再発見する江戸の底力―手銭家所蔵資料(文書・古典籍・美術)を繋ぎ活かす取り組み―」(島根大学、二〇一九年九月二四日)
- 基調講演 田中則雄「手銭家蔵書から見る出雲の文芸」
- デモンストレーション 昌子喜信「手銭家資料のデジタル化と公開」
- 講演 久保田啓一「杵築歌壇資料が語るもの―和歌史の見直しのきっかけとして―」
- 講演 伊藤善隆「近世俳諧史と大社俳壇」
- 講演 小林准士「寛政元年の松平雪川の出雲大社参詣に見る文化交流」
- パネルディスカッション 田中則雄(司会)、久保田啓一、伊藤善隆、小林准士、佐々木杏里
- ・伊藤善隆「『万家人名録』前後―手銭記念館所蔵資料から―」(立正大学人文科学研究所第二回定例発表会、立正大学品川キャンパス、二〇一九年十一月二七日)
- ・野本瑠美「地域の古典資料をいかす―手銭家所蔵資料を中心に―」(山陰研究センター一五周年記念行事シンポジウム「山陰地域研究の最前線」、島根大学、二〇一九年六月二五日)
- ・野本瑠美「手銭さの子と手紙」(第三七回山陰研究交流会、島根大学、二〇一九年十一月六日)
- ・野本瑠美「古典への招待「歌仙を学ぶ」」(出雲文化活用プロジェクト連続講座全4回、手銭家、二〇一九年八月三日、九月二七日、一〇月一八日、十一月一日)

《平成三十一年度企画展》

■ 館蔵絵画展（二十三点）

前期・三月十七日～四月二十二日

後期・四月二十六日～五月二十七日

所蔵絵画の優品を展示した。

【主な展示作品】

前期

鷲鷹図（双幅）

秋海棠雀図

梅林山水図

石叟猿図

竜虎図

金地廐図屏風

四季山水図押し絵貼り屏風

三十六歌仙画帖

後期

草花籬図屏風（左隻）

径山寺図

柘榴寿帯鳥図

牧童竹雀図

猿図扇面

洗硯烹茶図

松に孔雀図

曾我直庵

岸連山

横山黄仲祥

松花堂昭乗

龍・岸連山

虎・上代英彦

土佐派

曾我蕭白

土佐派

伝桃山百双之内

伝雪舟

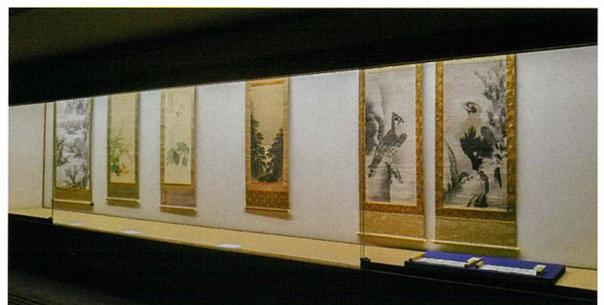
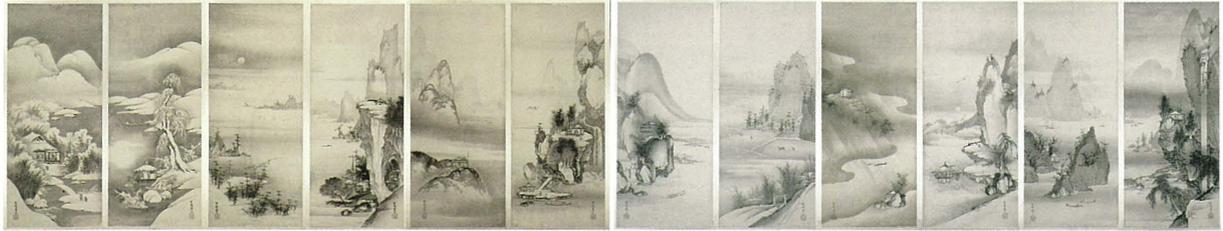
藝愛

狩野探幽

狩野派

古市金峨

大原吞舟など



■ 魅惑の漆器（七十二点）

六月五日〜九月二日

縄文時代から今日にいたるまで、日本人の生活のあらゆる場を彩ってきた漆器。

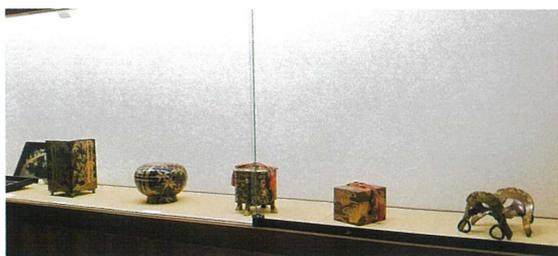
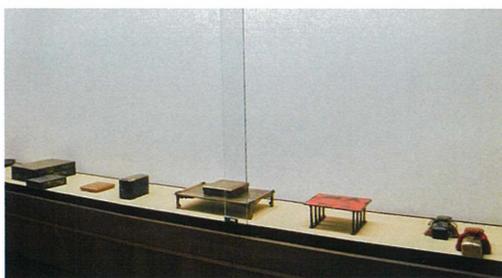
食器、茶道具、文房具といった用途と、塗る、描く、彫る、貼る、はめ込むなど加飾技法に注目し、江戸時代から大正時代までの日本の作品と、明から清にかけての中国の作品を中心に展示した。

【主な作品】

- 木地雲龍蒔絵鞍
- 朱地堆錦中央卓
- 根来塗八足卓
- 梨子地楼閣山水見返菊慈童蒔絵硯箱
- 堆朱屈輪軸盆
- 堆黒花鳥文香盆
- 堆朱花卉文大香合
- 菫醬香合
- 葵光琳蒔絵棗
- 刷毛目溜塗棗
- 桜青貝蒔絵中次
- 平目梨地富士山蒔絵茶箱
- 遠州好片木目絵替縁高
- 堅地屋清兵衛
- 堆朱はしか彫松下人物文菊形食籠
- 花鳥図箔絵密陀絵盆
- 琉球塗
- 絵替光琳蒔絵朱丸盆
- 牡丹蒔絵花月台
- 梶川派



朱地鶴亀文沈金大平
長寛楓散蒔絵引椀
吉野絵椀 など



■文字とともに(二十五点)

九月八日〜十月二十一日

絵巻物、和歌や漢詩による賛が添えられた絵画、意匠の中に文字をあしらった工芸品、銘をつけられた茶器など、美術表現と文字が共存した作品を展示した。

【主な展示作品】

烏帽子折物語屏風

三十六歌仙屏風

獅子舞図自画賛

不二見西行図・亀杯図

染付方餅・茶碗

山水図自画賛

梨子地芦手蒔絵手箱

朱地不昧公和歌富士菊竹蒔絵三ツ組大杯

茶杓 銘『夕空』

ととや写茶碗 銘『さざ浪』

詩中次

染付本香合

不昧公御好写心経香合

建部巢兆

鳥文斎栄之 蜀山人・賛

清水窯

十時梅崖

勝軍木庵光英

玄風庵

出雲焼

文叔・筆

真葛長造

五代小島漆壺斎

など



■ 布志名焼の文明開化（六十五点）

十月三十日～十二月二十三日

江戸時代、官窯と民窯が混在していた布志名は、明治時代に入ると生き残りを懸けてさまざまな方法を模索する。特に、複数の窯が合同で会社を興し手がけた輸出用の陶器は大成を収めるが、大正時代には他地域の大規模産地との競争に負けたり、海外の流行が変化したことなど様々な要因が重なって次第に規模は縮小し、多くの窯が閉じていった。

このような明治時代の布志名焼、特に輸出陶器製作についての当時の布志名の人々の取り組みや作品に与えられた海外での評価は、もっと広く知られ、後世に残していくべきものだと考え、海外で販売された作品、試行錯誤の跡を見る事の出来る作品、輸出陶器と同時期に作られていた様々な窯による国内向けの作品などを展示した。

【主な展示作品】

黄地色絵唐草文耳付胴メ花入

黄地色絵花鳥文花環付花瓶（一对）

緑釉ティーセット

黄釉蜜柑形蓋物

黄地金襴手唐子絵花瓶（個人蔵）

緑釉銀彩チヨコレートポットセット（個人蔵）

アメリカ・パナマ万博金賞賞状（個人蔵）

辰砂釉チヨコレートポット（個人蔵）

緑釉三足鉢（個人蔵）

コバルト釉金彩チヨコレートポット（ノリタケ 個人蔵）

色絵チヨコレートポット（リモージュ 個人蔵）

スタンダードグレイズマグカップ（ルックウッド 個人蔵）

コバルトパピヨンボヘミアガラス鉢（レッツ工房 個人蔵）

布志名焼下絵集（玉作資料館蔵） など



■ 出雲今昔Ⅲ〜学ぶ、遊ぶ〜（百四十一点）

令和二年一月八日〜三月八日

蔵書、古文書、伝来する諸道具と館蔵資料を併せて展示し、江戸時代の
大社と出雲を紹介する『出雲今昔』展。第三回は、学びと遊びに関する
蔵書と道具類を展示した。

江戸時代、地方の富裕な農民や商人の家には、社会的な役割の一つと
してその地域の文化や生活を支えることも求められていた。しかし蔵書
への書き込みや関連する諸道具からは、そういう義務感だけではなく、
学びと遊びのどちらにも真剣に向き合い、心底楽しんでいた様子が伝わっ
てくる。

【主な展示作品】

狂歌自画賛『鶯柳見物』 中臣正蔭

煎茶提籃

朱塗り将棋盤（明和七年作）

木製駒・陶製駒

碁盤 青貝碁笥

碁立指南大成

新刻象戯経抄

四書五経

近思録示蒙句解

玉山講義附録

狙徠先生学則

韻鏡 全

白石先生停雲集

蒙求俚諺補闕抄

松花堂山水帖

算法闕疑抄



庭訓往来

本朝千字文傍注 全

絵本写宝袋

檳榔樹二重口花器

古十組香秘考

大鼓頭附謡

葡萄詩絵小鼓胴

菊に短冊詩絵小鼓胴

浄瑠璃目録

歌曲松二色

など



総括

平成三十一年度事業について総括する。

今年度おこなった主な事業は、島根大学との包括的連携に関する協定締結に関連する事業、アウトリーチ事業、観光事業との連携である。

平成十七年度（二〇〇五）から継続してきた手銭家所蔵資料調査や、出雲文化活用プロジェクトの成果等を踏まえ、今年度、島根大学と手銭記念館は包括連携協定を結んだ。

包括連携協定の締結記念事業として開催したシンポジウム「資料から再発見する江戸の底力―手銭家所蔵資料（文書・古典籍・美術）を繋ぎ活かす取り組み―」では、これまでの活動の成果を改めて紹介するとともに、江戸時代の社会における文芸の役割や出雲地域の特性について新たな知見も述べられ、調査研究の方向性や成果が大きな意義を持つものであること、調査研究や資料活用が、次のステージに進みつつある事を広く知っていただく機会となった。

島根大学との連携の取り組みの一つとしては、ウェブサイトの多言語化に際して、島根大学に在学する各国の留学生にネイティブ・チェックを依頼した。次年度以降は、プロジェクトの成果も活用しつつ、島根大学との連携活動を多方面に展開していきたい。

（公財）図書館振興財団の助成事業の一環として、クラウド型デジタルアーカイブシステムであるADDEACから、手銭家の所蔵資料及び本プロジェクト報告書を公開した。また、国文学研究資料館により、所蔵資料のデジタル化が開始され、同館より公開の予定である。その他の文書資料についても、調査研究と平行して整理を進め、効率よく活用していくための環境を早く整える必要を強く感じている。

アウトリーチ事業では、次のとおりこれまで積み重ねてきた事業を継続しておこなった。

四年目となる連続講座「古典への招待」は今年度も、古典を鑑賞するための文法や語句などの基礎知識だけでなく、当時の社会や文化、人間関係にも触れる、深く広い講義が好評だった。講座自体を楽しみに毎年参加して下さる方も多く、定着してきたといえる。

昨年、プロジェクトとしては実施しなかった小学校でのワークショップ「能と狂言を体験してみよう！」は、今年度は大社町内の全小学校三校に企画を提

案し、二校で実施した。遙堀小学校では成果発表会で、このワークショップを活用した発表をおこなう予定だったが、このことは、小学校の教育においても活用出来る企画として受け入れられているものと評価できる。

「大社 能を知る集い」、「料理ワークショップ」はどちらも、参加者からは大変良い評価をいただき、次回も参加したいという感想が多い一方で、日程や開催時間、SNSによるイベント告知などさまざまな工夫にもかかわらず、新たな参加者数がなかなか増えない。

今年度初めておこなった「古文書解説講座」（毎月一回、全十二回）は、最後まで受講して下さった十名の方から継続して欲しいという希望が強くあり、次年度は自主講座として継続することになった。

助成事業を自主事業化させていくためには、年一回ではなく、複数回続く企画であることも条件の一つになると思われる。そういう点で、「大社 能を知る集い」と「料理ワークショップ」を今後どう継続させるか、考えていく必要があるだろう。

観光事業との連携として、ウェブサイトの多言語化、和食プログラム、ファムトリップ（モニターツアー）を実施した。

昨年度準備した「和食プログラム」は、今年度、手銭家を会場に第一回をおこなった。また、ファムトリップにも組み込んだ。室礼、食器だけでなく、できる限り地元の食材、当時の食材にもこだわったプログラムで、参加者、特に県外の参加者から、大変高い評価をいただいた。

一方、旧暦十一月の献立を三月に再現するということで、どうしても調達できない食材があるなど、課題もおおく見つかった。これらの事業は、今後、県、市町村の観光部署と協力しながら、実施にむけて取り組んでいく予定であるが、外国語ウェブサイトで紹介している旧家ミュージアムに企画を提案する場合、献立の選択や、会場の設営・段取りなど、解決しなければならぬ課題はおおい。

これまで六年にわたって文化庁の助成を受け、様々な事業をおこなってきたが、来年度の助成申請はおこなわず、助成による活動を見直す事になった。

アウトリーチ事業、観光事業との連携など、これまで助成を受けて成り立ってきた事業が来年度以降自主事業として継続できるかどうか、まだわからない。しかし、少なくともこれまで積み重ねてきた経験や成果を活かすような、また参加した方々からいただいたご意見やご期待に応えられるような取り組み方を模索しなければならぬと考える。

手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業

—平成三十一年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書—

出雲文化活用プロジェクト実行委員会

| | | | |
|------|--------|-----------------|------------------------------------|
| 会長 | 手銭 白三郎 | 公益財団法人手銭記念館 | 理事長 |
| 副会長 | 川向 誠 | 国立大学法人島根大学 | 附属図書館長 |
| 副会長 | 田中 則雄 | 国立大学法人島根大学 | 法文学部山陰研究センター長(法文学部教授) |
| 理事 | 要木 純一 | 国立大学法人島根大学 | 法文学部山陰研究センター 山陰研究プロジェクト研究員(法文学部教授) |
| 監事 | 竹下 啓行 | 国立大学法人島根大学 | 附属図書館 図書館情報課長 |
| 事務局長 | 手銭 裕子 | 公益財団法人手銭記念館 | 事務局長 |
| 事務局員 | 佐々木 杏里 | 公益財団法人手銭記念館 | 学芸員 |
| 事務局員 | 昌子 喜信 | 国立大学法人島根大学附属図書館 | 情報サービスグループ・リーダー |

二〇二〇年三月三十一日発行

編集 集 出雲文化活用プロジェクト

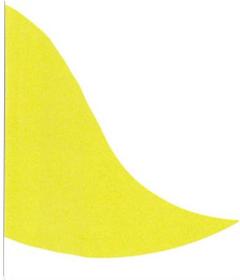
編集補助：連和加子 (TEZEN)

総括文責：佐々木杏里 (手銭記念館学芸員)

発行：公益財団法人手銭記念館

〒六九九一〇七五 島根県出雲市大社町杵築西二四五〇一

TEL/FAX：〇八五三一五三一二〇〇〇



主催：出雲文化活用プロジェクト

公益財団法人手銭記念館

島根大学法文学部山陰研究センター

島根大学附属図書館

助成：平成31年度 文化庁 地域の美術館・歴史博物館を中核としたクラスター形成事業

